

# 絶海の戦士たち

小湊拓也

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

拙作「波濤の戦士たち」の、誰も望んではいない続編であります。

# 目次

第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
107	95	79	62	48	30	1



## 第1話

歩道に突っ込んで来た車を、大熊座の櫓が身体で止めた。

聖衣をまとった大男に抱き止められた車の中で、運転手がなおもアクセルを踏み込んでいる。両眼は血走り、表情は狂気に歪み、もはや通行人を轢き殺す事しか頭にないように見える。

櫓に助けられた通行人たちも、同じような状態に陥っていた。

普通のサラリーマン、にしか見えない男が、花屋の女性従業員に殴りかかっている。「やめろ！」

一角獣座の邪武は割って入り、男の拳を顔面に受けた。もちろん一般人の繰り出すパンチなど効きはしない。

だが次の瞬間、後頭部に来た一撃は、いささか強烈だった。

女性従業員が、売り物である鉢植えを、邪武の頭に叩き付けたのだ。

「お、おい……」

邪武が頭を押さえ、呆気に取られている間。花屋の女性は、自分を殴ろうとした男の顔面にも、思いきり鉢植えをぶつけていた。

双方、運転席の男と同じような顔をしている。  
東京の、街中である。

目を血走らせ、狂気に顔を歪めた人々が、あちこちで暴力沙汰を引き起こしていた。  
通行人は殴り合い、車を運転している者は人を轢こうとしている。

檄が、それら暴走車をことごとく抱き止め、横転させた。

横転した車の中からドライバーたちが這い出し、獣じみた叫び声を張り上げ、殴り合う。

「お、おい！ やめんか！」

檄が困惑しながら、仲裁を試みている。この男が本気で馬鹿力を振るったら、仲裁のつもりで殺してしまいかねない。

「フツ……駄目だぜ。素人が、本気の殴り合いなんてやっちゃあ」

声と同時に、疾風が吹いた。音速の疾風。

殴り合っていた男たちが気を失い、倒れ伏す。全員の首筋に打ち込まれた手刀の動きを、邪武は辛うじて視認した。

「……よし、パーフェクト」

そんな事を言いながら、疾風が立ち止まる。

狼座的那智だった。

この男よりもいささか不器用な手加減をしている者もいる。

「ライオネット・ボンバー！」

小獅子座の蛮。

その気合いに合わせて路面が砕け、アスファルトやコンクリートの破片が舞い上がる。

殴り合ったり、立て看板や窓ガラスを叩き割ったりしていた人々が、いくら怯んで動きを止めた。

「こいつを喰らいたくなかったら大人しくしやがれよ、てめえら。いつまでもバカな事やってんじやねえ！」

「そ、そうざんす。聖闘士を怒らせたなら恐いざんすよ、だから痛つ、おバカな騒ぎはやめにして痛い痛い！ かつ髪の毛を引っ張ったら駄目ざんすよおおお！」

海蛇座の市が、子供たちに袋叩きにされている。

子供、大人、男女の区別なく、ここにいる人々は皆、外的な何かによつて正気を失っている。それは邪武にもわかる。

小宇宙、なのであろうか。

とにかく得体の知れぬ邪悪な力が、悪い空気のように漂って、人々の心を蝕んでいるのだ。

「くっ……っ、っ……っは……」

鉢植えを顔面に食らいながら、邪武は歯を食いしばった。

悪しき何かが、聖闘士である自分の心にまで入り込もうとしているのが感じられる。

小宇宙の修練を積んでいない一般の人々であれば、ひとたまりもなく狂気に侵されてしまうのは当然であった。

狂気に侵された人々を懸命に止めながら、那智も檄も、蛮も市も、この得体の知れない侵蝕に抗っているのだろう。

鉢植えを振りかぶっていた女性従業員が突然、膝をついた。そのまま崩れるように、倒れてしまう。

邪武は、何もしていない。

那智も、檄も、蛮も市も、何もしていない。

狂気に駆られ暴れていた人々が、しかし全員、糸を切られた人形の如く倒れ、意識を失っていた。命に別条はないようだ。

虚無。

邪武がまず感じたのは、それである。

無、そのものが人の形を成し、そこに佇んでいる。

そんな感じに、その少女はいつの間にか姿を現していた。

「御苦労だったね、お前たち……聖闘士を叩きのめすようなわけにはいかななくて、さぞかし大変だったろう」

今ここにいる青銅聖闘士5名よりも、いくつか年上と思われる少女。美しい容姿を想像させる声ではあるが、その顔は仮面に覆われている。女性聖闘士の、証である。

美しくしなやかに鍛え込まれた身体には、まるで水着のような白銀聖衣が貼り付いている。

「……確かにね。こいつらが・瞬とか星矢の野郎だったら、遠慮なくぶちのめしてたところですけど」

拳を握りながら邪武は言い、そして倒れた人々を見回した。

「それにしても……一体、何やったんですか。魔鈴さん」

「心を、無にしたのさ」

白銀聖闘士、鷲座の魔鈴は答えた。

「全員、しばらくすれば目を覚めます。その時には……正気に戻ってくれていれば、良いけれど」

「心を、無に……」

自分の心を、無にする。それを、他人の心にまで影響させる。

一般人とは言え、これだけ大勢の人間を、心の虚無で支配する。

(これが……白銀聖闘士……)

自分が最底辺の青銅聖闘士である事を、邪武は改めて認識せざるを得なかった。

これほど化け物じみた力を持つ白銀聖闘士を複数、撃破して、星矢たちはギリシア聖域へ向かったのだと言う。

わからず屋の星矢たちも、ようやく気付いたという事だ。本物の、アテナの存在に。

(お嬢様……)

右の拳を、邪武は左手で握り込んだ。

認めなければならぬ。今の自分に、城戸沙織の傍で戦う資格などないのだ。

いくら修行をやり直しても、もはや星矢たちとの実力差は埋まらない。

沙織のため出来る事など、何も無いのか。

そう思っていたところへ、ギリシア聖域から、この魔鈴という少女がやって来たのだ。

「……ねえ魔鈴さん。一体、何が起こってるんざんすか」

檄に助け起こされながら、市が問いかける。

「まさか、聖域の偽教皇が何か」

「言葉に気をつけなよ。あの教皇が偽物だと、まだ確証を掴めたわけじゃないんだからね」

魔鈴が、仮面の唇の前で人差し指を立てる。

「それに、これは……恐らく、教皇の仕業じゃあない。どうやら今、世界じゆうで同じような事が起こっているらしい。普通の人間が突然、おかしくなつて暴れ出す。人死にも出ている」

「くそ……こいつはどうも、アレに似てるぜ」

軽く頭を押さえながら、那智が言った。

「俺が、一輝の野郎に喰らわされたヤツ……あれほど強烈じゃあないが、感じは似てる。こんなもの普通の人間の脳みそに流し込まれたら、そりやおかしくなるぜ」

「聖域や教皇とは無関係の何者かが、悪しき力を全世界に垂れ流してる。今わかつてるのは、その程度さ」

魔鈴が言うのと、蛭が激昂した。

「どこのどいつか知らねえが、普通の人間を巻き込むんざあ許せねえ！ おい邪武、てめえをブチのめすのは後回しだ。まずはそいつらを、俺のライオネットボンバーで！」

「落ち着けよ。そいつらを許せねえのは、俺も同じだ」

この蛭という男、格段に腕を上げた。もう一度戦つて、邪武が勝てるかどうかはわからない。

だが仮に自分と蛭が2人がかりで挑んだとしても、もはや星矢にも瞬にも勝てないだろう。

そんな事をどうしても考えてしまう邪武に、星矢の師匠であるという女聖闘士が言葉をかける。

「お前たちには使命がある……アテナを守る、使命がね」

仮面の下で、魔鈴は微笑んだようだ。

「銀河戦争に臨んだ、運命の聖闘士10人……うち1人が欠けても、アテナを守る事は出来ない。そこに星矢とお前の違いなんてものは存在しないのさ。行くよ、聖域へ」

「……俺たちも、行くんですか？」

人々の倒れる様を見回しながら、檄が言う。

「だけど普通の人々が、こうして邪悪な力に脅かされている。それを何とかしなければ」  
「それは聖域の方で手を打っているはずさ。あの教皇も、アテナと敵対する道を選んだとは見え……地上の平和を守る義務まで捨て去ったわけじゃないようだからね。今のところは、 فقط」

教皇の命を受けて聖域の聖闘士が動き、この狂気の根源である何者かを討伐する。

そう、聖闘士は星矢たちだけでも自分たちだけでもないのだ、と邪武は改めて思った。  
「……そう言えばね、ちらりと耳に挟んだお話があるさんすよ」

市が言った。

「何とびつくり、あの漁牙と勇魚が聖闘士になったそうぞ」

「漁牙のバカが？ まあ確かに、身体だけは頑丈な奴だったからなあ」

蛮が、懐かしそうな声を出す。

「勇魚もなあ。俺、ずいぶん苛めてたからなあ。生きてるんなら、謝らねえと」

「あと海斗も」

市が、人差し指を立てた。

「あの要領良しの海斗が、やつぱり要領良く立ち回って、上手いこと聖衣を手に入れたみたいですねえ」

「海斗かあ。俺も何度、あいつをぶちのめそうかと思った事か」

檄が、苦笑している。

「因縁をつけても、さらりとかわされる。喧嘩を避けるのが、とんでもなく上手い奴だった」

「……気に入らねえな」

邪武は呻いた。

「あいつら本当に聖闘士になったんなら、何で日本へ帰って来ねえ……何で、お嬢様のために戦おうとしねえ……！」

さらさらと美しい金髪が、風もないのに揺らめいているように見えた。

長い髪である。女性か、と海斗は思った。

女性の聖闘士にしては、しかし仮面を着けていない。神々しくさえある美貌が、露わである。

両目を、閉ざしている。伏せられた長い睫毛が、何かとてつもないものを覆い隠しているように海斗は感じた。

眠っている、わけではないようだ。訓練場を見下ろす石段の上で座禅を組み、ぴんと背筋を伸ばしている。

体格は細いが、よく見ると肩幅の広い、明らかな男の体型である。アルデバランのように目立つ筋肉ではないが、しつかりと無駄なく鍛え込まれている事はわかる。

その身体に、粗末な白い衣服をまとっている。聖域で下働きをしている人々のように。

聖衣でも着用してくれていれば、せめて階級くらいは判明するのだが。

青銅聖闘士・羅針盤座の海斗は、そう思いつつ一応、頭を下げた。相手が何者なのかは不明だが、高位の白銀聖闘士かも知れないからだ。

長い金髪の男が、目を閉じたまま軽く睫毛を動かした。

目礼を返してくれたのだ、と判断しつつ、海斗は声をかけた。

「あの……」これから訓練場、使ったりしますか？ 俺たち今から戦闘訓練しようと思っ

てるんですけど」

「それは良い事だ。励みたまえ、私に構わず」

やはり目を閉じたまま、金髪の男は言った。

「私は、空気のようなものだ。気にせず鍛錬を積むと良い」

「何か、技の余波みたいなのが飛んで来るかも知れません。ちゃんと避けて下さいよ」

言い残し、海斗は訓練場の方へと降りて行った。3人の仲間と共にだ。

計4人の少年……いや、1人は少女だ。

青銅聖闘士、帆座のナギ。ほぼ同い年の城戸沙織と比べて若干凹凸に乏しいか、と思える細身に、今は聖衣をまといついていない。だが当然、仮面は着けている。

その仮面の下で、ナギは声を潜めた。

「……誰？ あの人」

「何か偉そうにしてやがるよな。どうせ白銀の誰かだろ」

言ったのは、竜骨座の漁牙である。

大柄でたくましい身体は、4人の中では最も強そうに見える。今は粗末な雑兵の装いだ、厳つい竜骨座の聖衣を装着すれば、さらに強そうに見えるだろう。実際、弱いわけではないのだが。

「……何と言うか、得体の知れない小宇宙を感じる」

鱸座の勇魚が言った。

漁牙とは対照的に、小柄な体格をしている。海斗よりも、いくらか細い。顔つきもたおやかで、昔は瞬と一緒によくいじめられていたものだ。

「強いて言うなら、デスマスク様に似ているかも。あの邪悪な小宇宙と、同じような感じがする」

「え……じゃあ、もしかして黄金聖闘士?」

石段の上で座禅を組む男を、ナギがちらりと盗み見る。

「あたしたちが知らない黄金聖闘士って言う……天秤座とか双子座とか、その辺りの人?」

「例の、ムウって人かも知れないぞ。女みたいに綺麗な人だつて話だからな」

海斗は言った。

牡羊座のムウが聖域に帰って来たのなら、海斗としては、長らく白羊宮を空けていた理由と事情を訊いてみたいところではある。

代わりに白羊宮を守った、とまでは言えないものの、十二宮最初の砦を蹂躪せんとする敵を相手に、いささか痛い思いをしたのは事実なのだ。

勇魚が、小さな声を出した。

「いろいろ噂を聞く、乙女座の黄金聖闘士っていうのが、あの人じゃないのかな」

「んなワケねえよ。乙女座だぜ？ ナギなんざあ問題にならねえくらい可愛い女の子に決まってんだろうが」

漁牙が、いくらか大きな声を出した。

「あんな胡散臭い兄ちゃんじゃねえ、キラキラするような美少女聖闘士」

その口を、海斗は左手で塞いだ。

石段の上の男が、目だけではなく耳も閉ざしてくれている事を祈るしかないまま、海斗は漁牙の大きな身体を引きずった。

「バカな事言つてないで、始めるぞ」

青銅聖闘士4名、聖衣なしでの実戦訓練である。

「勇魚と俺、ナギと漁牙でコンビを組んで2対2だ。ただし、裏切りも有りという事で」  
「じゃあ早速いかせてもらおうわ」

ナギの蹴りが、漁牙に叩き込まれていた。

蹴り飛ばされた少年の大きな身体が、訓練場の石畳に激突する。  
地響きが起こった。地面が揺れた。訓練場全体が、揺れていた。

漁牙の落下によって、ではない。

「な……何だ、地震か!？」

転倒しかけた身体を、どうにか踏みとどまらせながら、海斗は見回した。

石畳が、石柱や石段が、あちこちで碎け崩れている。

訓練場が、崩壊しつつあった。

「訓練場だけじゃない……聖域、全体が揺れている……？」

「これは……聖域近辺の、町や村も……！」

揺れて碎ける石畳の上で、勇魚が走り出す。

それを阻む形に、何か姿を現した。碎けた石畳を飛び散らせ、地中から出現していた。

「うわ……わわわわ、なな何だコイツらあー！」

起き上がろうとしながら悲鳴を上げる漁牙の周囲でも、それらは石畳の破片を押しつけ立ち上がっていた。

地中より現れた異形の群れが、青銅聖闘士4名を取り囲んでいる。

人間の体型をした、だが明らかに人間ではない生き物たち。

直立した両生類、あるいは四肢を生やした怪魚。

そんな姿をした怪物たちが、一斉に襲いかかって来る。鋭利な牙で、海斗と勇魚を食いちぎろうとする。水掻きと鉤爪を備えた手で、ナギと漁牙を掴み裂こうとする。

「ちよつと何よ、またハーデスの手先!？」

ナギの綺麗な両手が鋭い手刀となり、超高速で閃いて怪物たちの首を刎ねてゆく。

その近くでは勇魚が両手で豎琴を抱えたまま跳躍し、空中を舞うような蹴りで怪物たちを薙ぎ払い粉碎する。

「もしかして……また、グラード財団が……？」

「今度は、こんな連中を送り込んで来たって言うのか！」

食らいついてくる怪物たちの顔面に、海斗は次々と拳を打ち込んだ。

ぐちゃっ、ピチャッ！ と生々しい粉碎の手応えが返って来る。蛙のような魚のような顔面が複数、ことごとく砕け飛び散った。

群れを成す怪物たちの数は、しかし一向に減ったように見えない。訓練場のあちこちで石畳を粉碎し、地中から現れ出ては襲いかかって来る。

その群れの真っ只中に、漁牙の大きな身体が突っ込んで行く。

「俺に任せな！ スカルドラゴン・クラッシュャー！」

漁牙の小宇宙が、巨大な竜の骨格を形成した。

荒れ狂う骸骨竜が、群れる怪物たちを踏み潰し、尻尾で叩き潰し、牙で食いちぎる。

20体近くが、漁牙によって粉碎されていた。

30体以上の怪物たちが、補充されるかの如く即座に地中から現れ、凶暴に群がって来る。

「くっ……これは、他の聖闘士と合流した方が……」

襲いかかって来た怪物数匹を殴り潰しながら、海斗は逃げ道を探した。見回し、そして気付いた。

自分たちのいる場所が、石造りの訓練場ではなくなっていた。

ひび割れた荒野である。両生類のような怪魚のような生き物たちで満たされた、荒野。

無数の怪物たちが、あらゆる方向から群がり押し寄せて来る。

逃げ道など、どこにもなかった。

「逃げ道が欲しいのかね？　ならば用意してあげよう」

声が聞こえた。

怪物たちが人語を発している、わけではない。

何者かが、姿を現さずに喋っている。とてつもなく強大な小宇宙を有する、何者かが。

その小宇宙だけを、海斗は感じていた。

「だ……誰だ？」

「私は空気のようなもの。そう言ったであろう。さあ、選びたまえ」

巨大な扉が4つ、海斗たちを取り囲む形に浮かんでいる。

東西南北に各一つずつ、重厚な石の扉だけが浮かんでいるのだ。

それらがしかし、この荒野以外のどこかへと通じる扉である事が、海斗にはわかった。

「東の老門、南の病門、西の死門、北の生門……選ぶが良い。逃げ道は、ただ一つ。いや、全て滅びへと通ずる道かも知れぬがな。選ばず、そこで怪物たちに殺されるのも君たちの自由だ」

喋っている何者かは、自分たちを罠にはめようとしている。海斗は、そう思った。ならば、東西南北どの扉を選んだとしても、罠に陥るだけではないのか。

「これは……仏陀の、四門」

勇魚が呻いた。

「オルフェ先生から、聞いた事がある。仏陀は『老』『病』『死』の三苦を東南・西の門で悟った後、北の生門から出家したという。だ、だけど僕たちは……」

訓練場で、青銅聖闘士4人が右往左往してる。まるで見えない敵とでも戦っているかのようなのだ。

その様子を、石段の上から見下ろしている男に、山羊座のシユラは言葉を投げた。

「何をしている」

「見たまえ彼らを。まるで釈尊の掌を走り回る、孫悟空のようではないか」

目を閉じたまま、その男は見ているのだ。己の掌の上で逃げ惑う、青銅聖闘士たちの有り様を。

「あるいは餓鬼界・修羅界の亡者たちかな。フツ、可愛いものよ」

「……青銅聖闘士で遊ぶな」

シユラは左の手刀をかざした。聖剣で幻覚を切り裂き、4人を救い出してやらねばならない。

「まあ待ちたまえ。彼らが四門のいずれを選ぶか、それを見届けようではないか」

「黄金聖闘士随一の暇人が……」

シユラは舌打ちをした。

「そろそろ忙しくなるかも知れんのだぞ。心構えくらいはしておけ」

「何か、由々しき事態でも？」

「貴様も、噂くらいは聞いていようが……」

そこでシユラは、話を中断した。

青銅聖闘士4名が、こちらに歩み寄って来たからだ。

「この男の作り出した幻覚から、ひとまずは脱出したようである。」

「あんた……あんたの仕業ですか。今の、わけわかんない幻覚は」

羅針盤座の海斗が、不機嫌そのものの声を発する。

「まあ戦闘訓練の一環って事にしときますけどね」

「躊躇いもなく生門を選ぶのだな、君たちは」

結跏趺坐を組んだ男が、目を開く事なく微笑んだ。

「遙か昔……目的を達せず生きながらえる事よりも、死をもって先へ進む事を選んだ男がいた。彼は戦士として、迷う事なく死門を選んだという。見習おう、という気持ちはあるのかね？」

「その人はその人で凄いでしょけれど、俺たち死にたくありませんから」

海斗が至極もつともな事を言う。

「女神のため、地上の平和を守るため、聖域を、教皇をお守りするため、命を捨てなきゃいけない時はあるでしょう。あんなワケわかんない所で死を選んでなんかいられないですよ」

「フツ……それも、そうかな」

「あの、シユラ様……誰なんですか？ この人」

「黄金聖闘士の中で、最もたちの悪い男だ。関わり合いにならない方がいい……それよりもだ」

シユラは1度、咳払いをした。

「教皇から、お前たち4人に命令が下った。心して聞け」

「は、はい」

4名の青銅聖闘士が、姿勢を正した。

「邪悪なるものが、蘇ろうとしている……世界各地で起こる異変、お前たちも聞いてはいるだろう」

「あの……街中とかで人が、いきなりおかしくなつて暴れ出したりするっていう」

人死にも出ているらしい、という噂は海斗も耳にしている。

「その狂気の根源たるものが、復活しつつあるのだ。とある場所……南緯47度9分、西経126度43分の海において！」

シユラは、右の手刀を一閃させた。

聖剣。小宇宙の斬撃。

シユラの傍で、空間がざっくりと裂けた。

そこから、瘴気にも似た、目に見えぬ禍々しい何かが溢れ出す。

「うわ……な、何だこりやああああ！」

漁牙が、まずは悲鳴を上げた。

「こ、これって小宇宙？　なのか？」

「デスマスク様の小宇宙とも違う……この、禍々しさ……」

勇魚が呻く。ナギも、息を呑んでいる。

「これが……こんなのが、世界じゆうに拡散してるって事ですか？」

「こんなの……普通の人が浴びちゃったら、そりやおかしくなる。一応は聖闘士の端く

れである俺たちだつて……ちよつと、キツいもんな」

歯を食いしばり、拳を握る海斗の傍に、いつの間にか巨大な箱が出現していた。

漁牙、ナギ、勇魚の傍にも。

羅針盤座、竜骨座、艫座、帆座。4つの青銅聖衣を内包する、聖衣櫃。

「俺たち死にたくありませんから……なんて、言つてる場合じゃないみたいですね」

海斗の言葉に合わせるかの如く、羅針盤座の聖衣櫃が開いた。

光が、飛び出した。

その光を身にまといながら、海斗が言う。

「行きます。その空間の裂け目を通つて、行けるつて事ですよね？」

「そうだ。この狂気の根源たるものが居る場所へと、繋がつている」

シユラは答え、4人の青銅聖闘士をちらりと見渡した。

全員、各々の聖衣を装着し終えている。

南天のアルゴ号を成す、4つの星座。

これらが1つに集い、英雄の戦船が完成した時、黄金聖闘士にも等しい小宇宙が発現するという。

「馬鹿げた言い伝えを、俺は信じているわけではない。だが……お前たちは、まがりなりにも1度は死線をくぐり抜けた。その経験を活かして見せろ。そして狂気の根源を討

ち滅ぼすのだ」

「あの……」

おずおずと空間の裂け目を指差しながら、漁牙がいささか弱気な声を発する。

「これ、行つて……帰つて来れる、んスよね？」

「この裂け目は、我が聖剣の斬撃がもたらしたものだ。俺が生きている限り消える事は無い。お前たち程度の小宇宙を持つ者であれば、自由に通り抜ける事が出来る。何度でもな」

答えつつ、シユラは睨み据えた。

「だからと言つて、何もせず逃げ帰つて来てみる。その首を刎ね、聖域の入り口に晒してくれるぞ」

「うへえ……いい、行つて参ります」

漁牙が、まずは空間の裂け目に飛び込んだ。

それに続こうとしながら、ナギが振り向いた。

「あのう、シユラ様……上手いこと敵をやっつけて帰つて来たら、何か御褒美とか出ますか？」

見返りを求めず、地上の愛と平和のために戦うのが聖闘士の務めであろうが。

そう怒鳴ろうとして、シユラは思いとどまった。自分に、そんな立派な事を口走る資

格はない。

「……何が欲しい。黄金聖闘士の裁量で叶う限りの事は、してやろう」

「水瓶座のカミュ様に、会わせて欲しいんです！」

帆座の聖衣のチェスト部分で、ナギは両手を握り合わせた。

「デートのセツティング……なんて、黄金聖闘士の方に期待は出来ませんから。弟子入りの口利きとか、して下さると嬉しいかなあーなんて。1対1の模擬戦の最中で、つい偶然に仮面が外れちゃうような立ち回り、あたしやって見せますからっ」

「………善処はしてやる。さっさと行け」

「青銅聖闘士、帆座のナギ！ これより戦地に赴きますッ」

嬉しそうに敬礼をしてから、ナギは空間の裂け目に飛び込んだ。

「シユラ様、僕も1つ……望む事が……」

勇魚が言いかけ、豎琴を抱き締めた。

「……いえ、何でもありません。行きます」

空間の裂け目に身を滑り込ませる勇魚を、シユラはじつと見送った。

勇魚が何を望んでいたのか、それはわかる。

しかしそれは、黄金聖闘士の裁量で決められる事ではなかった。

琴座のオルフェが、ハーデス軍の一員として聖域に戦いを挑んできたら。

シユラ個人にオルフェを見逃す意思があつたとしても、結局は他の聖闘士が彼と戦う事になるのだ。

海斗が、仲間3人の後をなかなか追おうとせず、こちらを見上げている。

シユラではなく、結跏趺坐の男を見据えている。

「行く前に1つだけ聞かせて下さい。その死門を選んだっていう人……結局、どうなつたんですか？」

「死門に入ったからには生きておれぬ。戦いの中で、命を落とした」

両目を閉ざしたまま、男は答えた。

「彼の戦いが何であつたのか、何のために彼は戦つていたのか、彼の戦いと死が何をもちらしたのか。それは残念ながら、この時代には伝わっていない……一方、君たちは生門を選んでしまった。死よりも過酷な、果てなき苦行の道を歩む事になるぞ」

「金持ちに犬みたく飼われて、高慢ちきなお嬢様に馬みたく扱われる生活……よりは、マシじゃないかなって思いますよ」

海斗は、不敵に微笑んだ。

「……行きます、シユラ様。それと誰だかわかんない人。帰つて来たら、あんたが何者なのかも教えて下さいよ」

空間の裂け目に飛び込みながら、海斗はもう一言だけ残した。

「もしも、あんたが牡羊座のムウ様なら……いなくなつてた理由、ちゃんと聞かせてもらいますからね」

青銅聖闘士4名が、裂け目の中へと姿を消した。

両目を閉じた男が、結跏趺坐を組んだまま微笑する。

「彼がジャミールから帰つて来ない理由……むしろ我々の方が、知りたいのだがな」

シユラは知っている。牡羊座のムウが、ここ聖域に戻つて来ない理由。

あの男は、知つてはならない事を知つてしまったのだ。

いずれ、お前にジャミールまで行つてもらわねばならなくなるかも知れん。教皇は

シユラに、そう言った。

(ムウよ、俺は貴様を殺さねばならなくなる……あの男のように)

「それにしても、相変わらず見事なものだな。君の聖剣」

結跏趺坐の男が、褒めてくれた。

「空間を切り裂き、任意の場所に繋げるとは」

「この程度、お前にとつても容易い事だろう」

「フツ……どうかな。私では、南緯47度9分の地点に送るつもりが、うっかり六道のど

こかへ飛ばしてしまいかねん」

南緯47度9分、西経126度43分。

そこが、いかなる場所であるのか。この男も、知ってはいるはずだ。

「……浮上したようだな、かの悪しき神殿が」

「まだ完全ではあるまい。あれが完全に蘇ったとしたら……この程度では済まん」

自身が宙に残した空間の裂け目を見据え、シユラは言った。

悪しき狂気が、そこから溢れ出している。漏洩している。

ここ聖域には、アテナの聖なる小宇宙が満ちているのだ。これしきの狂気は問題にならない。聖域に出入りする人々が、狂気に侵される事はない。

今のところは、だ。

「青銅聖闘士では、荷が重すぎるのではないかね？」

目を閉じた男が、至極もつともな事を言う。

「先程、彼らに見せた幻覚……私は、あのような怪物たちを登場させるつもりはなかった」

「怪物だと？」

「あれは紛れもなく、深き者ども……私の作り出す幻影にまで影響を及ぼしてくるほどには、力を復活させているようだ」

「深き者どもの主が、か」

この男の小宇宙にまで影響をもたらすほどの何か、南緯47度9分・西経126度

43分の海において、復活を遂げようとしているのだ。

青銅聖闘士4名を無駄死にさせる事にしかならないのではないかとはいえないか、とはシユラも思う。

「我ら黄金聖闘士の誰かを向かわせるべきではないか、と私は思うのだが」

「聖域は今、厳戒態勢にある。黄金聖闘士を動かすわけにはいかん……お前も、噂は聞いているのだろうか？」

「由々しき事態、なのだったな」

「日本へ向かった白銀聖闘士10名が、ことごとく倒されたらしい」

「例の、偽物の女神を擁立しているという青銅聖闘士たちか……なかなかやるではないか。窮鼠猫を嘯む、というわけかな」

シユラは思う。

この男から見れば、白銀聖闘士と青銅聖闘士の力の差など、猫と鼠の違いでしかないのだろう。

南緯47度9分・西経126度43分。

ニュージーランド、南米大陸、南極大陸に囲まれた、南太平洋・到達困難点。

絶海とも言うべき海域に、その神殿は浮上していた。

「人は、浅い眠りの中で夢を見る……」

神殿最奥部。闇の中で、男は呟いた。

「我らが支配者も、夢を見ておられる……その眠りは、浅い。目覚めの時は近いぞ」

闇の中で、その身を包む鎧が、鈍く禍々しく光を発する。

男の両眼もまた、邪悪な光を孕んでいた。

「世の人間どもは、その大いなる夢を、我らが支配者と共有し……狂う者は狂い、死ぬ者は死ぬ。生き延びた者のみが、新しき世の民となるのだ」

「狂気に抗い、我らに戦いを挑んでくる者もおりましょう」

別の男が言った。

やはり、鈍く禍々しく輝く鎧を、身にまとっている。

「先日捕えた、あの少年のように……ダゴン様。あの者の処遇、いかがなさるおつもりか」

「人質として生かしておけ。何かの取引に、使えるかも知れん」

「人質で動く相手とも思えませんが……」

「人質に使えぬとしても、あれほどの戦士。ただ殺してしまうのは、力と命の無駄遣いというもの」

3人目の男が、優しげな声を発する。

「いずれ私が、操り人形として可愛がってあげましょう」

「それに、こやつらを率いる実戦指揮官が、この先いくらでも必要になる」

ダゴン様、と呼ばれた男が、この場を集めて群れをなす者たちを睥睨する。

闇の中、聞きようによっては何かしらの言語と受け取れぬ事もない呻きを発する、奇怪な生き物たち。

一応は人間の体型をした、だが人間ではない者たちが、偉大なる旧き支配者の・御名を唱和しているのだ。

直立した両生類、あるいは四肢を生やした怪魚。そんな生き物たちが。

「深き者ども……我らが支配者の忠実なる尖兵たちよ、時は来たー！」

潮の匂いに満ちた闇の中、ダゴンの声が高らかに響き渡る。

「我らの望む新しき世は、しかし旧き世でもある。世の人々が、偉大なる支配者のもたらす、心地良き狂気に抱かれていた時代……旧き良き世の再来を、しかし拒む者どもがいる。その名はアテナの聖闘士！ あやつらに対する、一切の暴虐を今お前たちに許可しよう。殺し、喰らい、その魂を我らが支配者に捧げるのだ！」

## 第2話

青銅聖闘士・羅針盤座の海斗は思った。

自分たちはまた誰かの作り出した幻覚の中に迷い込んでしまったのではないかと。

悪夢の中にある光景の如く、いびつに捻じ曲がった楼閣が、いくつも聳え立っている。石造り、であろうか。

足元は、どうやら石畳だ。

発狂した彫刻家作り上げた石細工、のような建造物群が、南太平洋の真ん中に浮かび上がっている。

上空からは、そう見えるであろう。

「な……何でえ、ここは一体……」

青銅聖闘士・竜骨座の漁牙が、落ち着きなく周囲を見回している。

「薄気味悪い小宇宙が、プンプン臭いやがる。ゲロ吐きそうだ」

「あたしたち聖闘士だから、まだいいけど……普通の人がここに来ちゃったら、吐くくらいじゃ済まないわね」

青銅聖闘士・帆座のナギが、軽く頭を押しさえる。

「こんなのが今、世界じゆうに垂れ流されて……」

「大勢の人たちを、発狂させている」

青銅聖闘士・鱸座の勇魚が、片膝をついて身を屈め、石畳に片手を触れる。

「この下……地下なのか海底なのかは、わからないけれど」

「ああ、とんでもねえゲテモノが眠ってやがるな、どうやら。そいつが、このワケわかんねえ小宇宙を垂れ流してやがる」

「眠ってるって言うか、そろそろお目覚めみたいね。また眠らせてあげるのが、あたしたちのお仕事」

ナギが、左掌に右拳を打ち込んだ。

「とつとと始めましょうか。手っ取り早く終わらせて、カミュ様に会いに行くの!」

「……邪念に満ちた小宇宙が溢れ出して、ナギ」

苦笑しつつ、海斗は空を見上げた。

まるで三日月の如く、空中に裂け目が生じて消えず残っている。

シユラの聖剣がもたらした、空間の裂け目。

そこを通って、青銅聖闘士4名が今、この謎めいた場所に降り立ったところである。

神殿、なのであろうか。

地下に眠る、この禍々しい小宇宙の発生源を、神などと呼べるならばだ。

「……お出迎えが来たぜ、おい」

漁牙が言った。

無数の人影らしきものが、青銅聖闘士4名を取り囲む形に、湧き出して来る。歪み聳える楼閣の、中から、陰から。

人間大の、武装したカエル。あるいは四肢を生やした怪魚。そんな姿の怪物たちだ。

あの幻覚の中で海斗たちを襲った、異形の生き物の群れ。

幻覚の彼らは素手で海斗たちを引き裂こうとしていたが今、現実に存在している彼らは全員、槍を手に行っている。

魚の骨の如くギザギザとした穂先。長柄のノコギリ、のようでもある。

そんな凶器が、あらゆる方向から海斗に、漁牙に、ナギと勇魚に、襲いかかる。

「あの人……」

海斗はふと思い、言った。

「あの幻覚の中で、こいつらとの模擬戦を経験させてくれたのか……こいつらが何者なのか、もしかしたら知ってるのかも」

「そんなら、もつと話聞いときや良かったな」

呑気な声を出しながら、漁牙が拳を振るう。

砲丸を叩き付けるようなパンチが、襲い来る槍を何本もへし折り、それを握る怪物た

ちの上半身をグシャグシャアツと粉碎した。

「どんな奴らが相手でも、あたしは蹴散らしてカミュ様に会いに行くのッ！」

欲望そのものの小宇宙を燃やしながら、ナギが怪物の群れに突入して行く。

少女の形良い両手が手刀を成し、多方向に閃いた。

ノコギリ状の穂先が、ことごとく切断される。カエルのような魚のような生き物たちの生首が、スパスパと宙を舞う。

「ああんカミュ様！ 帆座のナギが今、参りますっ！ 必殺、セーリング・ウェイブ・ソルトー！」

ナギが跳躍した。

水着のような聖衣をまとう細身が、空中で柔らかく反り返り、しなやかな脚が跳ね上がって下から上へと弧を描く。

海面が盛り上がり、高波となって天を衝く。そんな光景を海斗は一瞬、確かに見た。

20体近い怪物たちが、その高波に打ち上げられ、高々と宙を舞いながら砕け散った。

「ナギは……少しくらい心に邪念があつた方が、強いみたいだね」

微笑みながら勇魚が身を揺らし、あちこちから襲い来る槍をかわしてゆく。

くるくると躍動する回避の舞い。それに合わせて、左右の足が高速離陸し、回し蹴りの形に弧を描く。

「僕の琴は、まだ修行中……オルフェ先生の足元にも及ばない、未熟な技」

豎琴を抱き締めたまま勇魚は、2匹3匹と怪物たちを蹴り碎いてゆく。

「とても人様に聴かせられるものじゃないから、君たちにはこれを……ヴォルテクス・レクイエム！」

ナギの技が高波であるならば、勇魚の技は大渦・であった。

超加速する連続回し蹴りが、怪物たちを潰し碎いてゆく。大量の肉片と体液の飛沫が、勇魚を中心として激しく渦を巻いた。

「俺もそろそろ……自分の技、考えないとな」

眩きながら海斗は、自分に向かって来る怪物たちを見据えた。

「まだ、ちよつと思いつかないから……先生すいません使わせてもらいます、マーブルトリパー！」

人型のカエルあるいは魚としか表現し得ない異形の群れが、振りかざした槍もろとも碎け散る。食べられそうにない挽肉が、大量にぶちまけられる。

蜥蜴座のミスティが放つ本物のマーブルトリパーは、このような無様な残骸を残さない。あらゆるものを原子の塵に変え、綺麗さっぱり消滅させる。

「ふん……そこそこは、やるようだな。アテナの聖闘士ども」

声が出た。

同時に、凄まじい小宇宙が、羅針盤座の聖衣の上から海斗の全身を打つ。

まだ大量に生き残っている怪物たちを掻き分けるようにして、1人の聖闘士が姿を現したところである。

いや、聖闘士ではない。

聖衣のようなものをまとった、筋骨たくましい男。だが聖闘士ではない。聖闘士とはあまりにも異質な存在。

あの鋼鉄聖闘士など問題にならないほど、おぞましい何者かである事が、海斗にはわかった。

最も特徴的なのは、両肩だ。聖衣のショルダー部分のようなものが、無数の、蠢く触手を生やしている。大型のイソギンチャクが、左右の肩に1体ずつ寄生しているかのようだ。

そんな怪物じみた鎧をまとった男が、名乗りを上げた。

「我が名はムナガラー。大いなるルルイエを守る者の1人よ」

「1人だと……つまり、あと何人かいるって事か」

海斗は言った。

「なのに、あんた1人で来た……俺たちが、なめられてるって事かな」

「拍子抜けよ。我らはな、黄金聖闘士どもの襲撃を想定して防備を固めているのだぞ？」

青銅の小僧小娘など、何匹群れようが俺一人で充分よ」

「そうかい。じゃあ俺らは全員がかりでボコらせてもらうぜえ！」

漁牙の小宇宙が燃え上がり、巨大な竜の骨格を成した。

「喰らいやがれ！ スカルドラゴン・クラッシュャー！」

「あたしはカミュ様に会いに行く！ 邪魔する奴にはセーリング・ウェイブ・ソルト！」

「安らかに……ヴォルテクス・レクイエム！」

ナギが高波を、勇魚が大渦を発生させる。

3方向からの攻撃を、ムナガラーはかわさなかつた。

「貴様たちの血を、肉を、命を、魂を、我らが支配者に捧げてくれようぞ……アビス・ト

ルネード！」

巨大な禍々しい小宇宙が、ムナガラーの周囲で荒れ狂う。

高波が、大渦が、骨の竜が、砕け散った。

ナギが、勇魚が、漁牙が、吹っ飛んで石畳に激突する。

荒れ狂う攻撃的小宇宙の奔流。その軌道を、流れを、海斗は見据えた。見極めた。

見極めながら、踏み込んだ。ムナガラーの禍々しい小宇宙が、全身あちこちをかすめ

て走る。

だが、直撃はなかつた。

「む……貴様」

ムナガラーが軽く息を呑む。

その眼前に、海斗は到着していた。

「俺、逃げ足は速くてね……逃げ回ってるうちに、相手の懐に飛び込んでいた。そんな事、よくあるんだよっ」

拳を繰り出す。ムナガラーの身体が、激しく揺らぐ。

そこへ2発、3発と、海斗は左右の拳を叩き込んだ。

流星拳。

聖闘士の技の、基本とも言うべき攻撃だ。パンチを、とにかく可能な限り高速で放つ。

これを、必殺技と呼べる段階にまで高めた聖闘士もいるらしい。

海斗の流星拳は、そこまでのものではない。

だが2発、3発とムナガラーを揺るがし、怯ませる事は出来た。

「うぬっ……小僧……」

「とどめだ、マーブルトリパー！」

師匠からの借り物である技が、ムナガラーを直撃した。

吹っ飛んだムナガラーが、しかし大柄な身体を軽やかに一転させ、着地する。

「……それが全力か、アテナの聖闘士よ」

不敵な、凶悪な笑みが、ニヤリと海斗を威圧する。

ムナガラ一の両肩で、無数の触手が蠢いた。そして伸びた。

「取るに足らぬ、微弱な小宇宙だが……まあ吸い尽くしてくれようか。このアビス・テンタクルでなあ！」

海斗の身体が、宙に浮いた。

ムナガラ一の両肩から伸びて来たものたちが、少年の全身を絡め取り、持ち上げている。

「ぐっ……う……っ！」

海斗の悲鳴が、呼吸が、詰まった。

触手が、首に巻き付いているだけではない。羅針盤座の聖衣の上からミシミシ……ッと、容赦なく締め付けを加えてくる。

このままでは絞め殺される、あるいは五体を引きちぎられる……いや、それよりも。全身から力が、小宇宙が、吸い出されてゆくのを、海斗は呆然と感じていた。

イソギンチャクのようなムナガラ一の両肩が、無数の触手で、海斗の身体から小宇宙を吸引しつつあるのだ。

「ふん……小宇宙の、質量も貧弱そのもの。この程度の者どもがよくもまあ、たつた4人でルルイエに乗り込んで来たものよ。アテナや黄金聖闘士どもは、どうやら貴様らを

捨て石に使うつもりのような」

「俺たちは……捨て石……程度の役にも、まだ立つちやいない……」

触手の拘束に抗う力もないまま、海斗は呻いた。

「……このまま……倒れる……わけには、いかないんだよ……っつー！」

「ほごくな小僧。そんな様で何が出来る」

「俺が、何にも出来なくても……な……」

海斗の言葉に応えるかのように、まず漁牙が立ち上がっていた。

「おいクラゲ野郎……いや、イソギンチャクだかホヤだかは知らねえがよ。とにかく酔か何かに合えて食っちまうぞ」

「……あたし遠慮しとくわ。こんなゲテモノ、食べたらお腹壊しちゃう」

ナギも、それに勇魚も、立ち上がっていた。

「死にそうだね海斗。弔いの曲でも、弾いてあげようか？」

「……いいね、弾いてやれよ。こいつの、ために……」

全身を締め付ける触手の、発生源である男に、海斗はニヤリと微笑を向けた。

「……群れるしか能のない、雑魚どもが」

海斗を絡め捕えて空中に持ち上げたまま、ムナガラが怒りの小宇宙を燃やす。

「貴様ら小魚の群れは、より強い生物に喰われるしかないのだ。それが海の掟よ！」

その小宇宙が、激しく渦を巻いた。

「我らの偉大なる支配者が、夢を見る！ その夢を共有し、狂う者は狂い死ぬ者は死ぬ！  
そして生き残った者の糧となるのだ！ 大いなる狂気の時代の到来、邪魔はさせん！  
アビス・トルネードオオオオツ！」

巨大な小宇宙の奔流が、青銅聖闘士3名を襲う。

禍々しく荒れ狂う小宇宙の流れを、行く道を、しかし漁牙もナギも勇魚も見切つて  
た。

3人が、アビス・トルネードをかわしながら、揺らめくような足取りで踏み込んで行  
く。

ムナガラーが狼狽した。

「何ッ……！」

「海斗が、手本を見せてくれたんでなあ」

漁牙が笑い、勇魚が語る。

「僕たちは、四身一体の戦船。羅針盤座の聖闘士が成し遂げた事は、僕たちにも可能にな  
る。こうやって小宇宙を同調させれば、ね……羅針盤は、船を導くものだから」

語りながら、豎琴を爪弾く。ムナガラーの眼前、と言うか耳元に近い位置でだ。

「吊いの楽曲、聞いてもらおうよ。ストリンガー・ノクターン！」

「一緒に喰らいやがれ、スカルドラゴン・クラッシュヤー！」

先ほどの勇魚たちのように、今度はムナガラーが吹っ飛んでいた。

触手がちぎれ、海斗の身体が解放されて落下する。

漁牙が、受け止めてくれた。

「大丈夫かよ、海斗」

「まあな……助かったよ」

漁牙の大きな身体に半ば寄りかかるようにして、海斗はどうか立ち上がった。

ムナガラーも、立ち上がっている。

「雑魚どもがああ……許さんぞ、粉々に噛み砕いてくれる！」

ちぎれた触手たちがニョロニョロと再生し、凶暴に蠢き躍る。その発生源である両肩

が、円形に口を開き、牙を剥いている。

青銅聖闘士4人を、触手で捕えて食い殺す。そんな構えである。

「粉々になるのは、あんたの方よ。これ、何だかわかる？」

ナギが1歩、進み出た。

その細い全身で、小宇宙が揺らめいている。天女の、羽衣のように。

小宇宙で組成された、羽衣……と言うより、帆であった。

羽衣のような帆が、何かを受け止め、蓄積し、くすぶらせている。

「海斗のおかげでね、あんたの技を見切る事が出来た。見切って、受け止めて、力に変える……帆は、風を受けて船を動かすものだから」

小宇宙の帆が、光に変わり、ナギの身体から3方向に分かれて飛んだ、まるで流星のように。

「……セーリング・カウンター」

3つの光が、漁牙の、勇魚の、海斗の身体に吸い込まれる。

力を吸い取られた身体に、新たな力が流れ込んで来るのを、海斗は感じた。

それはナギが小宇宙の帆で受け止め、蓄積したもの……アビス・トルネードの全威力を、4分割したものの1つだった。

「貴様ら……!」

「……覚えておけ。聖闘士に、同じ技は2度も通用しないんだ」

海斗が、そして漁牙が、勇魚が、ナギが、身構えた。

4つの星座から成る、英雄の戦船が、そこに出現していた。

「まとめて噛み砕かれるだけの小魚でも、この程度の事は出来る! アルゴ・エクスクラメーション!」

4分割された力が、4人の聖闘士によって放たれた。各々の小宇宙を、上乘せされた状態だ。



「……とか言いながら、あんたも一人で戦おうってわけ？　あたしたちと」

ナギが、続いて勇魚が言う。

「僕たちとしては、その方が都合がいい……各個撃破を、させてもらうだけさ」

「我々も忙しくてね。偉大なる支配者の目覚めに備えて、いろいろと準備しなければならぬ事がある」

ムナガラがイソギンチャクであるならば、この男はヒトデだった。全身あちこちで、星型の金属鎧が不気味に輝いている。

「総出で害虫退治に繰り出すほど、暇ではないのさ。たまたま手の空いた私が、仕方がないから君たちを駆除してあげよう……小賢しいアテナの尖兵たちよ、このゾス・オムモグの手にかかる事を光栄に思いたまえ」

アテナの聖闘士たちが、このルルイエに、たった4人で攻め込んで来たという。

無謀である。笑いたくなるほどの、愚かしさである。

だが単身で攻め入って来た、この少年に比べれば、まだいくらかは頭を使っているのかも知れない。

「我らの支配者が、まだ完全には目覚めていない今であれば……一人でどうにか出来る、とでも思ったのか」

鉄格子の向こうで鎖に繋がれている少年に、ダゴンは語りかけた。

少年は、応えない。海水に浸しても錆びる事のない特殊な鎖で四肢を拘束されたまま、無言で俯いている。潮の香りに満ちた闇の中で、目を閉ざしている。

眠っている……いや、死んでいるようにすら見えてしまう。

「わかるぞ少年よ。お前は今、眠っているのでも死んでいるのでもない……力を、蓄えているのだ。ミソペサメノスに近い力で、己を休眠状態に落とし込んでいる」

屍のようでもある少年の身体は、鎧に覆われている。アテナの聖闘士たちが身にまとう、聖衣に相当する武具だ。

引き剥がす事は、出来なかった。この鎧は聖衣の如く自らの意思を持ち、少年の身体にしがみついているのだ。

「このような状態にあつてなお、お前は我らと戦う事を諦めてはいない。命を奪っておくべき、なのかも知れん」

「それはいけませんよ、ダゴン様」

声をかけられた。

声で、辛うじて男とわかる。たおやかな容姿は、しかし美女のようでもある。

「これほどの戦士、ただ殺してしまうのは生命と力の無駄遣いというもの……そう申し上げたばかりではありませんか」

その美貌は、深海魚を思わせる不気味な形状の兜で、禍々しく彩られている。

細い全身のあちこちに貼り付いているのも、金属製の深海魚とも言うべき、おぞましい形の甲冑だ。

「私が、使いこなして御覧に入れますよ。忠実な操り人形として、ね」

「いささか樂觀が過ぎるのではないか、ハイドラよ」

ダゴンは言った。

「こやつの力、実際に戦った私でなければ本当にはわからぬ。殺すには惜しい、それは確かだが危険な男でもあるのだぞ」

「殺すのは、いつでも出来ます。私はね……この少年が、気に入ったのですよ」

ねつとりと鉄格子にすがりつきながら、ハイドラが艶然と微笑む。

ダゴンは、それ以上は何も言わなかった。

この少年を気に入っているのは、ハイドラだけではない。

この少年を生かしておく。それは、偉大なる支配者の意思でもあるのだ。

「……………おや？」

ハイドラが、軽く目を見張った。

「我らの支配者が……また、夢を見ておられるようですね」

「そうだな。目覚めの近い、激しい夢だ」

この場に普通の人間がいれば、その者はたちどころに狂死を遂げているだろう。

「地上では、多くの人間どもが……この夢を、偉大なる支配者と共有しているのであるな」

狂気に取り憑かれ、通りすがりの人間を襲う者もいるだろう。建物から身を投げける者もいるだろう。

車を運転しながら発狂し、人を轢きながら自身も死ぬ。そんな者もいるだろう。

狂う者は狂い、死ぬ者は死ぬ。生き残った者のみが、新たなる狂気の王国に住まう民となるのだ。

「お前も、この夢を受け入れさせよしてくれれば……我らの同志として、生かしておいてやるものを」

鉄格子の向こうの少年に、ダゴンは語りかけた。やはり、応えはない。

この少年が、己を仮死に近い休眠状態に落とし込んでいる。

それはやはり、この狂気の夢の影響を受けぬようにするためであろう。

## 第3話

ゾス・オムモグの全身で、星が輝いた。

金属製のヒトデ、とも言うべき星型の部分鎧の数々。それらが、

「格の違いを思い知るが良い、アテナの聖闘士たち……ディープシー・スターライトリッパー！」

闇よりも禍々しい光を発した。

五芒星の形をした、それらは光の刃であった。

「うぐっ……！」

丸ノコギリの如く回転する星型の光刃が、羅針盤座の聖衣の上からぶつかって来る。

海斗は、吹っ飛んでいた。

漁牙も、ナギも勇魚も、回転飛翔する五芒星の直撃を喰らって微かな血飛沫を飛ばし、倒れていた。

聖衣がなければ全員、ズタズタに切り刻まれていたところである。

海斗は、よろりと立ち上がった。

弱々しく辛うじて立ち上がるとうする青銅聖闘士4名を睥睨しながら、ゾス・オムモ

グは傲然と佇んでいる。

「運良くムナガラを倒した事で、どうやら調子に乗ってしまったようだね。だが幸運は長続きしない……ムナガラとの戦いで、君たちはもはや一生分の幸運を使い果たしてしまったのだよ」

「……ふざけた事……言わないで……ッ！」

言葉を発する気力を最初に取り戻したのは、帆座のナギである。

「あたしのラツキーはね、カミュ様とデートするまで取つといてあるの。貯めてあるの！ 全然、使ってなんかいないの！ さっきの奴に勝つたのは幸運じゃあない、あたしたちの実力！ それを思い知らせてやる！」

邪念と欲望に満ちた小宇宙を燃やしながら、ナギが踏み込む。ゾス・オムモグに、殴りかかる。

その時、地面が揺れた。

どうやらルルイエという名称であるらしい、この浮上神殿そのものが、揺れている。あの時と、同じだった。

聖域の訓練場で、あの結跏趺坐の男に見せられた幻覚。

あれと同じく、地面に、石畳に、亀裂が走る。いびつな形の楼閣が、崩壊してゆく。ルルイエ全体が、崩壊しつつあった。

海底に、あるいは海底に眠っていたものが目覚め、神殿を粉碎しながら起き上がろうとしている。

あの時と同じく、これも幻覚だ。

目覚めつつある巨大で禍々しいものが、幻覚を作り出しているのだ。

それが海斗にはわかった。

幻覚の中で海斗は、いや漁牙もナギも勇魚も、瓦礫の濁流に押し流されてゆく。幻覚に、逆らう事が出来ない。

「我らの大いなる支配者が、夢を見ておられる……」

ゾス・オムモグの、声が聞こえた。

「同じ夢を見るがいい。偉大なる支配者と、狂気を共有するがいい。そして狂い死ね！ 君たちにとっては、それが最も幸せな死となるであろうよ」

砂浜で、海斗は目を覚ました。

ルルイエ、ではない。南太平洋のどこかの国まで、自分は流されてしまったのか。

否。ここは、日本だ。

下手をしたらもう2度と帰る事はない、と思っていた国の、どこかの海岸に自分は今、倒れている。

「くっ……っ、っは……」

よろよろと、海斗は立ち上がった。そして見回す。

人影が、近くに立っていた。懐かしい小宇宙も感じた。

浅瀬に佇む、1人の聖闘士。

その身を包む白銀聖衣はひび割れ、激戦の直後である事を物語っている。

「……ミステイ先生……」

海斗の呼びかけに、白銀聖闘士・蜥蜴座のミステイは応えない。ただ、微笑みただけだ。

その美貌を、一筋の鮮血がつつたう。

「先生……!」

ミステイが倒れた。

海斗は駆け寄り、抱き止めようとしたが、間に合わなかった。

そしてミステイの背後に立っていた、もう1人の聖闘士と、対峙する事となった。

同じくひび割れた聖衣をまとった、こちらは恐らく青銅聖闘士。

血まみれだった。自身の流血と、他者の返り血。血の臭いが、禍々しい小宇宙と共に

立ち昇り、渦巻いている。

海斗は後退りをした。

これほど戦闘的な小宇宙、聖域でも感じた事はない。

顔は、よく見えなかった。血の汚れが、凶悪な陰影を作っている。

その血生臭い陰影の中で、眼光が燃えている。獐猛なまでの戦闘意欲が、その両眼で燃え盛っている。

違う、と海斗は感じた。白羊宮を守る真似事をした程度の自分とは、戦闘経験の質量も違い過ぎる。

この青銅聖闘士は、これほど血まみれになるまで戦い、何度も死にかけながら立ち上がり、想像を絶する場数を踏んできたのだ。

そして今、白銀聖闘士である蜥蜴座のミステイをも打ち倒すに至ったのか。

「お前……」

知っている、と海斗は感じた。

ひび割れた青銅聖衣をまとう、この聖闘士を、自分は知っている。

だが思い出す努力をする暇もなく、海斗は吹っ飛んでいた。

流星拳だった。

それも海斗が繰り出すようなものとは違う。

必殺の破壊力を持つ、本物の流星拳が、音速で海斗を叩きのめしていた。

吹っ飛ばされながら、海斗は見た。血生臭い小宇宙が形作る、怪物の姿を。

荒々しく羽ばたきながら猛々しく駆け、その蹄であらゆるものを蹴り潰し踏み砕く、それは凶暴なペガサスだった。

海斗は、顔面から地面に激突した。

そこはもう、砂浜ではなかった。海岸ではなかった。日本ではなかった。

ギリシア・聖域。

十二宮が、崩壊していた。

教皇の間、そしてアテナ神殿へと続く道が、瓦礫の荒野と化している。

海斗は、弱々しく身を起こした。

死体と、目が合った。

「……………デスマスク……………様……………」

呆然と、呼びかけてみる。返事はない。

黄金聖闘士・蟹座のデスマスクは、死んでいた。

その屍を踏みつけて立つ、1人の男。

聖闘士であろうが、聖衣は装着していない。細く力強く鍛え込まれた裸の上半身に、

長い黒髪がまとわりついている。

その黒髪の下に、龍がいた。

男の背中に、荒ぶる龍の姿が浮かび上がっている。刺青か。いや、猛り狂う小宇宙の発現だ、と海斗は思った。

龍を背負った、その男が、もう1つの死体を右手で引きずり起こしている。

男の右手に髪を掴まれた、その死体もまた、黄金聖衣をまもっていた。

「……シユラ様……」

海斗たちをルルイエに送り届けてくれた黄金聖闘士が、デスマスクと同じく、物言わぬ屍と成り果てている。

死体ではない黄金聖闘士もいた。蠍座のミロと、水瓶座のカミュ。

海斗の方を見て、何かを言いかけたその両名が突然、凍り付いた。

そして碎け散った。

氷の破片をキラキラと舞い散らせながら、1人の聖闘士が冷然と佇んでいる。

見ているだけで心まで凍てつく、冷氣そのもののような聖衣をまとった金髪の少年。

「お前……お前ら……」

海斗は、よろりと後退りをした。

知っている。自分は、この謎めいた聖闘士たちを知っている。だが、名を口にする事が出来ない。

あり得ないからだ。

彼らが聖域にいるはずはなく、そして黄金聖闘士を倒せるはずもない。幻覚だ。

それは海斗も、頭では理解している。

その幻覚の中心で、幻覚にしても起こり得ない事態が生じていた。

1人の黄金聖闘士が、跪いている。1人の少女に向かって、まるで許しを乞うかのよう。

美しい少女だった。人間の美しさではない、と海斗は思った。

死神の、美しさだ。

跪いている黄金聖闘士の、顔は見えない。まどつているのが何座の聖衣であるのかも、海斗は知らない。

だが、そのプラチナ色の髪には見覚えがある。見間違えようもない。

「教皇……！」

海斗は呼びかける。教皇は、応えない。

少女が、まるで死神の大鎌の如く携えた黄金の杖を、教皇に突きつけた。

教皇は倒れ伏し、動かなくなった。

少女が、海斗の方を向く。

人間を、人間として見ない。あの頃から全く変わっていない傲慢冷酷な眼差しが、海

斗を射すくめる。

1000人の子供たちは、この少女にとっては馬であり、犬であり、豚であった。

「俺は……自力で、聖闘士になったんだぞ……あんたたちからは、もう解放されたんだ……」

海斗は呻き、叫び、そして駆け出した。

「なのはまだ、俺たちに絡んでくるのか！　そして俺たちの居場所を奪うのかあああッ！」

殺すしかない、と海斗は思った。

この少女の、命を奪う。

そのために踏み込もうとした海斗の足元に、黄金の屍が投げ出された。

立ち止まり、硬直しながら、海斗は青ざめた。顔面だけでなく、心からも血の気が引いてゆく。

「あ……アイオリア……先生……」

黄金聖衣をまとう死体となったアイオリアの傍で、海斗は弱々しく両膝をついた。

1人の青銅聖闘士が、禍々しく歩み寄って来る。何か大きなものを引きずりながらだ。

先程、海斗に流星拳を喰らわせた聖闘士。ひび割れた聖衣をまとう全身から、血生臭

い小宇宙を立ち昇らせ、それが荒ぶるペガサスを形作っている。

ペガサスの聖闘士が、引きずっていたものを放り捨てた。アルデバランの死体だった。

幻覚である。それは海斗も、頭では理解している。

だが今、心の内に生じて燃え盛っているのは、本物の憎悪だった。

「…………お前…………お前、なのか…………」

凶暴なペガサスが、襲いかかって来る。

本物の流星拳に全身を粉碎されながら、海斗は叫んでいた。

「お前が…………グラード財団の手先になって、ミステイ先生を殺して！ 俺たちの居場所を奪うのか星矢あああああああああ！」

ゾス・オムモグの拳を喰らって、海斗が吹っ飛んで行く。そして楼閣の外壁に激突し、ずり落ちた。

「ハのっ……………」

帆座のナギは跳躍して細身を捻り、左脚を一閃させた。

その蹴りが、ゾス・オムモグの肩に命中した……と言うより、肩で防御されていた。

五芒星の形をしたシオルダー・アーマーが、ナギの回し蹴りを弾き返しながら光を発

する。

「無駄なあがきも、ここまでだ！ デイープシー・スターライトバースト！」

「くっ……セーリング・カウンター……！」

小宇宙で組成された帆が、まるで天女の羽衣の如く、ナギの全身にまとわりつく。

そして、全てちぎれて飛び散った。ゾス・オムモグの放った光に、粉碎されていた。

「きやつ……あ……ッ！」

ナギもまた吹っ飛び、石畳に激突した。

そこへゾス・オムモグが嘲笑を浴びせる。

「ムナガラーとの戦いを、私なりに研究させていただいた。君たちは、確かに連携攻撃に  
関しては実に見るべきものがある。だが個々の力となると、これはもう全くお話になら  
ない。特に、我らが偉大なる支配者と夢を共有し、心乱れた今となつては！ 心を1つ  
にしての連携など、もはや望むべくもあるまい？」

「偉大なる支配者と……夢を、共有……？」

よろりと立ち上がりながら、ナギは仮面越しに嘲笑を返した。

「もしかして、今の……悪趣味な幻覚が、そうだつてんじゃないでしょうね……」

十二宮が崩壊し、黄金聖闘士たちが皆殺しにされていた。

教皇も死んだ。水瓶座のカミュも、凍らされて砕かれた。

「あんなので、聖闘士の心を折ろうなんて……いやまあ折れちゃった奴もいるみたいだけど」

倒れたまま動かない海斗に、ナギはちらりと視線を投げた。

聖闘士の心にまで、これほどの影響をもたらすほどの幻覚。それが今、このルルイエから全世界に発信されている。

小宇宙の修練を積んでいない一般の人々が、どのような目に遭っているのか。少なくとも「悪趣味な幻覚」で済む事態ではないだろう。

(何とか……何とか、しないと……っ！)

焦燥の中でナギは、音楽を聞いた。

幻聴、ではない。何者かが近くで、音楽を奏でている。

小宇宙を、音楽という形で発現させている。

「神々は、お喋りをやめた……」

艦座の勇魚が、竖琴を弾いていた。

「鳥たちは、歌うのをやめた……星も、しばし輝きを留める……」

ルルイエの地下、あるいは海底に眠り、夢を見続けている邪悪な存在。

その夢が、世界じゅうの人々に狂気をもたらしている。

拡散する狂気の勢いが、しかし僅かに、だが確かに、弱まっているのをナギは感じた。

「……なんて、わけにはいかない。僕はオルフェ先生じゃないからね」

豎琴を爪弾きながら、勇魚が微笑む。苦しげな笑顔だった。

この少年は今、己の命を削りながら、小宇宙の調べを奏でているのだ。

「デストリップ・セレナーデ……まだ練習中だけど、そんな事を言ってる場合じゃない。目覚めつつある、おぞましい神を……再び、夢も見ないほどの眠りの中に……」

「させると思うか！」

ゾス・オムモグが、勇魚に向かって踏み込もうとする。

その眼前に、竜骨座の漁牙が立ち塞がった。

「そいつあこつちのセリフよ。勇魚、おめえはソロライブに集中してな……このお客さんは、俺が相手してやつからよ」

「頼りないけど、任せるしかないかな……ナギ、海斗と一緒に先へ行つて」

勇魚が言った。

「僕の、この未熟な調べでは……狂気の夢の拡散を、止めておく事しか出来ない。それも、僕が力尽きれば終わりだ……だから、その前に」

「……親玉を、叩けつて？ 悪趣味な夢を垂れ流してる、ゲテモノの神様を」

「倒す……のは無理でも、一撃を与えて……一時的にでもいい、弱らせて欲しいんだ。僕の、この全然なつてないデストリップ・セレナーデでも……眠らせられる、くらいに

……」

「小賢しい真似をしようと言うのか！」

攻撃の動きを見せたゾス・オムモグに向かって、漁牙が拳を放つ。

「おおよ！ 目一杯、小賢しくいかせてもらうぜえスカルドラゴン・クラッシュャー！」  
「うぬっ……！」

防御の構えのままゾス・オムモグが、漁牙の小宇宙に圧されて後退する。

その間、ナギは海斗に駆け寄っていた。

「ほら、しっかりしなさいよね。あんなの幻覚だって、本当はわかってるんでしょ？」

「ナギ……」

海斗が呻く。

「幻覚……だけど、俺は……」

「しっかりしやがればカ野郎！ あんなの嘘っぱちに決まってるーがああああ！」

猛然とゾス・オムモグに殴りかかりながら、漁牙が吼える。

「ほんとに起こるワケねえだろ、あんな事！ 負けるわけねえだろうが、グラード財団な  
んぞに黄金聖闘士がよオオオオオオッ！」

## 第4話

夢を見るのは、眠りの浅い時である。それは人も神も同様だ。

神の眠りが、ほんの少しずつではあるが深まってゆく。夢が、弱まってゆく。

それを、ダゴンは感じていた。

「アテナの聖闘士が……恐れ知らずにも、我らが神を眠らせようとう？」

ルルイエ内部に、いくら慌ただしく足音を響かせながら、ダゴンは地上へと向かっていった。いや、海上と叫ぶべきか。

南太平洋上に浮かび上がったルルイエ表層部では現在、ゾス・オムモグがアテナの聖闘士たちを迎え撃っているはずであった。

その戦いの最中、得体の知れぬ技を放って、神を眠らせにかかる。

そんな芸当が、青銅聖闘士に可能なのか。

現に、神の夢の出力が、ゆっくりとはあるが確実に弱まりつつあるのをダゴンは感じていた。

このまま何も手を打たずにいれば、大いに時間はかかるにせよ神は再び、夢も見ないほどの深き眠りに陥ってしまうだろう。

無論、そうなる前にゾス・オムモグが聖闘士たちを葬り去ってくれば良い。だが相手は、ムナガラを倒した者たちなのだ。

最下級の青銅聖闘士が4名。そう聞いていた。

いくら甘く見ていた事を、ダゴンとしては認めざるを得ない。

「良かろう、アテナの聖闘士よ。私が直々に、お前たちを……：我が神への、供物にしてやる」

語りかけながら、ダゴンは立ち止まった。

不穏な小宇宙が、渦巻いている。

何者かが、不意打ちを狙っている。

「……何にしても、お前たちは死ぬのだ。せめて正々堂々と戦って見せてはどうか？」

「正々堂々が出来るのは、黄金の人たち……あとまあ、白銀の上の方の人たち」

潮の匂いに満ちた闇の中から、細い人影が2つ現れ、ダゴンの行く手を阻んで立つ。

聖衣をまとった、少年と少女。言葉を発しているのは、少女の方だ。

「あたしらは青銅の下っ端……手段を選ばず、なりふり構わず、いかしてもらおうわよ。ほら海斗、しゃんとしなさい！ こんな戦い、さつさと終わらせなきゃいけないんだからね！」

水着のような青銅聖衣をまとう少女の細身が、小宇宙を立ち昇らせ揺らめかせる。

「さっさと終わらせて、カミュ様に会いに行くのよ！」

「何という……邪念妄念に満ちた、おぞましい小宇宙である事か」

ダゴンは呆れた。

「暗黒聖闘士、あるいはハーデスの冥闘士でさえ、これほど邪悪な小宇宙を持つてはいないだろう。我らが神のもたらす夢の中で、せめて心地良く狂い果てるが良い」

「夢……そうだよな。あんなものは、ただの夢だ。悪趣味な幻覚だ」

少年の方が、まるで己に言い聞かせるかのように呻く。

「おかしな夢で、人を狂わせる神様なんてもの……放っておくわけには、いかないんだよ」

聖闘士で言うところの、聖衣と同じようなものであろう。

禍々しく輝く鎧に身を包んだ、若い男である。ノコギリの如く鋭利な金属の鱗が、その全身あちこちで広がっている。

金属の半魚人、とても表現すべき装いをした男が、ちらりと周囲を見回した。

「……君たち2人しか、いないようだな？ 4人いる、と聞いていたのだが」

「4人もいるんだから、効率良く分業をしないとね」

青銅聖闘士・帆座のナギが言った。

「上では勇魚と漁牙が、まあ柄にもなく頑張っちゃってるから。あたしらも負けてらんないわけだ」

「なるほど……このダゴンを、青銅聖闘士2名で倒せると。君たちは愚かしくも思ってしまったわけだな」

ダゴン、と名乗った男の体内で、とてつもなく強大な小宇宙がうねり渦巻くのを、海斗は感じ取った。

「恐れ知らずな事よ。我らを相手に、人数を分けるとは」

「ちんたらやっつてられないからね。ほら、やるわよ海斗！」

「あ……ああ」

こんな事をしている場合では、ないのではないか。

青銅聖闘士・羅針盤座の海斗は、そんな事を思った。

こんな所で、こんな手強そうな敵と戦うよりも、ギリシア・聖域に一刻も早く戻るべきではないのか。

先程の幻覚。あれは本当に、幻覚なのか。

聖域で今、現実を起こっている事ではないのか。

グラード財団が、本格的に戦いを挑んできたのだとしたら。星矢たちが城戸沙織に率いられて、聖域に攻め入ったのだとしたら。

海斗も、ナギも漁牙も勇魚も、教皇のもとで戦うべきではないのか。聖域を、守るために。アテナを、教皇を、守るために。

もちろん星矢たちが、十二宮を突破など出来るわけがない。

だが海斗の脳裏からは、あの光景が消えてはくれなかった。

崩壊した十二宮。瓦礫の中に倒れ伏す黄金聖闘士たち。跪きながら絶命する教皇。

幻覚ではないはずの、そんな光景に、海斗が囚われている間。ナギは、すでに戦いを始めていた。

「セーリング・ウェイブ・ソルト！」

水着にも似た青銅聖衣をまとう少女の細身が、舞うように跳躍しながら柔らかく反り返る。

すらりと形良い脚が、真下から真上へと一閃し弧を描く。

その蹴りに合わせて、高波が生じた。迸る、小宇宙の高波。

それをダゴンは、

「フツ……子供のお遊戯にしては、なかなかだ」

左手の人差し指一本で、粉碎した。

深き子どもを数体まとめて粉碎する高波が、ダゴンの人差し指に触れられただけで弱々しい水飛沫と化し、散りながら消滅したのだ。

間髪入れず、今度は自分が攻撃を仕掛けるべきなのだろうと海斗は思う。頭では、わかっている。

ダゴンという、この強大な敵に、いくらかでも隙を見出す事が出来るとすれば。それはナギの攻撃に対処し終えたばかりの、今しかない。

だが海斗は、やはり思ってしまった。

こんな所で戦っている場合ではない。早急にギリシアへ……否、自分一人は日本へ向かうべきではないのか。

日本では、白銀聖闘士・蜥蜴座のミスティが今頃、星矢たちと戦っているはずだ。

加勢しなければならぬ、と海斗は思う。

加勢はおこがましいにせよ、師匠の楯になるくらい事は出来る。

自分が楯にならないければ、あの幻覚が現実のものとなる、のではないか。

海斗の脳裏で、胸中で、ミスティは微笑みながら血を流している。

そして浅瀬の中に倒れ、動かなくなる。

(ミスティ先生……！)

この場にいない師匠に、海斗が心の中で呼びかけている間。

ダゴンが、拳を振るっていた。

その拳圧と、小宇宙の奔流とが一緒くたになってナギを直撃する。

少女の細身が、風に舞う木の葉のように吹っ飛んで天井に激突し、石畳に落下した。

「ナギ……………」

息を呑む海斗に、ダゴンが微笑みかける。優しく、冷たく。

「我らの神が、君に……………随分と、怖い夢を見せてしまったようだな」

「……………」

海斗は後退りをした。

強大極まる小宇宙が、禍々しく渦巻きながら押し寄せて来る。

違う、と海斗は感じた。

このダゴンという男、ムナガラーやゾス・オムモグと比べても格が違う。

仮に勇魚と漁牙がここにいて4人がかりで戦ったとしても、歯が立たないのではないか。

そんな相手をナギ1人に押し付けて自分は一体、何をやっているのか。

「安心したまえ、もう怖い思いはさせない。その幻覚から、君を解放してあげよう……………あ  
るいは現実なのかもしれない、その幻覚から」

「ナギ……………」

呆然と、海斗は呼びかけた。

ナギは応えない。倒れたまま動かない。

生死を確認している暇すら、今はない。

ダゴンが、金属の鰭を装着した腕で、激しく空間を薙いだからだ。

「この海で、我らが神に抱かれ眠るが良い……レイジング・オーシャン！」

巨大な怪魚が、力強く鰭を羽ばたかせて海中を猛進する。

その様を、海斗は確かに見た。

島と見紛うばかりの怪魚。ダゴンの小宇宙によつて形作られた、その巨大な牙が、眼前に迫る。

海斗は動けなかった。身体も、闘志も、萎縮しきつている。

動けぬ海斗の代わりに、動けなかったナギが動いていた。

潮臭い石畳に倒れ伏していた細身が、跳ね起きると同時に跳躍し、海斗の面前に着地する。

「……セーリング・カウンターツー！」

ナギの小宇宙が、羽衣の如く揺らめきながら少女の全身にまとわりつく。

敵の攻撃を受け止めて己の推進力に変える、小宇宙の帆。

それが、しかし怪魚の牙に食いちぎられた。

ダゴンの巨大な小宇宙が、ナギを直撃していた。

水着のような帆座の聖衣が、痛々しくひび割れ、その亀裂から鮮血がしぶく様を、海

斗はただ呆然と見つめるしかなかった。

「ナギ……」

名を呼び、腕を広げる、くらいの事は出来る。

倒れ込んで来る少女の細身を、海斗は抱き止めていた。

「おい、ナギ……ナギってば、おい！　しっかり、しろよ……」

「……………かい……………」

ひび割れた仮面の下でナギが、辛うじて聞き取れる声を発した。

「ちよつと……………どこに、いるのよ……………声、ずいぶん……………遠いんだけど……………」

「何、言ってるんだよ……………」

ここにいる、すぐ近くにいるじやないか。

その言葉を海斗は、発する事が出来なかった。

ナギには今、海斗の顔が見えていない。海斗の声が、聞こえていない。

こうして抱き支えられている感触も、ないのではないか。

痛みすら感じていない、のかも知れない。

痛覚そのものが、ダゴンによって破壊された状態。

ナギは今、すべての感覚を失いつつあるのだ。

言っても仕方のない事を、海斗は口にしていた。

「ナギ……俺の、せいで……」

「……ちゃんと、見たわね？ ……あいつの技……」

仮面の下でナギは微笑んだ、のであろうか。

「1度、見た技は……聖闘士には通用しない……それ、証明しなさいよね……」

「ナギ……おい！」

「……あたし……ちよつと、休んでるから……」

それきり、ナギは何も言わなくなった。

呼びかけても返事はない。揺さぶっても、反応してくれない。

「やめておけ。その少女は死んだ……受け入れる。そつとしておいてやるが良い」

言いつつダゴンが、技の構えに入っている。

動かぬナギの身体を、海斗はそつと石畳に横たえた。

そして立ち上がり、ダゴンと対峙する。

(ミステイ先生……)

心の中で、海斗は問いかけた。

(大丈夫、ですよね……いりませんよね、俺の加勢なんて……俺、ここで戦わなきゃ……)

「そう、それで良い。戦え、アテナの聖闘士よ」

ダゴンが、寧猛に笑う。

「ここまで来たら、もはや戦って死ぬしかないのだ……レイジング・オーシャン！」

荒ぶる小宇宙が、巨大な怪魚を形作り、牙を剥く。

しつかりと見据えながら、海斗は踏み込んでいた。

凄まじい小宇宙の流れが、はつきりと見えた。

衝撃が、海斗の肩と背中をかすめて行く。

踏み込みながら、怪魚の牙をかわし、かわすと同時にダゴンの懐へと達する。

そこで海斗は、小宇宙を一気に燃焼させた。

ダゴンが、息を呑んでいる。

「何……」

「ナギの言葉が、聞こえてなかったみたいだな。聖闘士に、1度見た技は通用しない……」

「マールトリパー！」

海斗の技が、ダゴンを粉碎した。

否、砕け散ったのは残像だった。ダゴンはすでに、海斗の背後にいる。

「仲間の死によつて、強くなる……それが本当に出来る者、そうはいない。ほめてやるぞ

少年！」

凄まじい風が、海斗の細い身体を揺らした。

ダゴンの拳、続いて蹴り。

暴風に舞う木の葉か羽毛のように頼りなくよろめきながら、しかし海斗はかわしていた。

かわしながら、拳を繰り出す。

聖闘士の闘技の基本、流星拳。2発、3発と立て続けに叩き込む。

命中した、ように見えた。しかし手応えがない。

海斗の流星拳は全て、ダゴンの身体を擦り抜けていた。

幽体のような残像を残す、高速の回避だった。

「攻撃が……今一つ、のようだな？ 君は」

ダゴンの嘲笑、と同時に攻撃が来た。拳。海斗は、今度はかわせなかった。

「ぐっ……！」

吹っ飛び、石壁に激突し、ずり落ちる海斗に、ダゴンが言葉をかける。

「回避をしながら、私の死角を狙って来る……君のその動きには実に見るべきものがある。だが悲しいかな、決定力不足は如何ともしがたいようだ。攻撃は他の者に任せて自身は攪乱と牽制に徹するのが、君に最も適した戦い方と言える」

言葉と一緒に、ダゴンの小宇宙が渦巻き燃え上がる。

「やはり人数を分けるべきではなかったな。連携なくしては戦えない……1人では、何も出来ない。それが君たちだ」

「そんな事は……」

壁にすがりつくようにして、海斗はどうか立ち上がった。

「この、羅針盤座なんていう……地味な聖衣をもらった時点で、わかってたよ……だけど今は！ 1人で、戦わなきゃいけない！ あんたを、それにこの神様を、とつと倒して！ 聖域の様子を見に帰らなきゃならないんだ！」

そして、日本へも行かなければならない。

そんな事を思いつつ海斗は踏み込み、流星拳を放った。

お前の流星は、まるで子供の投げる小石だな。師匠ミステイには、そんな事を言われたものだ。

その小石が、当たった。

「む……っ」

ダゴンの上体が、微かに揺らぐ。

命中の感触を握り締めながら、海斗はもう一撃、流星拳を繰り出した。

ダゴンの身体が高速で揺れ、残像を残す。

流星拳はしかし先程のように、残像を擦り抜ける事はなかった。

ダゴンの顔面から、微量の血飛沫が散った。

「私に……攻撃を、当てた……だど？」

「俺は……羅針盤座の、聖闘士だぞ……」

直撃の手応えを感じながら、海斗は言った。

「自分の攻撃を、正しい方向へ導く……くらいの事は出来ないとなあ！」

連続で、海斗は流星拳を叩き込んだ。

全て、命中した。

ダゴンの身体が、微かな鮮血の飛沫を散らせて揺らぐ。だが倒れはしない。

「フツ……本当に悲しいかな。君の攻撃は、ただ当たるだけだ。この決定力の無さ……

まるで子供の投げる小石よ！」

ミスティと同じような事を言いながらダゴンが、一気に小宇宙を燃焼させる。

「本当の攻撃というものを見せてやろう……レイジング・オーシャン！」

襲い来る怪魚の牙を、ダゴンの攻撃的小宇宙の流れを、今度は見切る事が出来ない。

苦し紛れに海斗は、両手を高速回転させた。

空気の防護幕を作り出し、敵の攻撃を無効化する。師匠ミスティが得意とする防御手段。

だがミスティならばともかく海斗では、ナギのセーリング・カウンターをも打ち破る攻撃を、防御など出来るわけがなかった。

弱々しい空気の防護幕が、ちぎれて散って消え失せる。

レイジング・オーシャンの直撃。それだけを、海斗は感じた。

（何が……一度見た技は、聖闘士には通用しない……だよ……）

痛みはない。痛覚など、一瞬にして破壊されていた。

倒れたようだが、石畳の感触もない。手足を動かす事も出来ない。

「君たちは、よく戦った。その魂を我らが神への供物にする……のは、やめておいてあげよう。この海の底で、安らかに眠るがよい」

すぐ近くにいるはずのダゴンの声が、遠い。

耳も、聞こえなくなりつつある、目は、もう見えない。

ルルイエ内部に漂う潮の臭いも、感じられない。こみ上げる血の味も、わからない。

全ての感覚を、海斗は破壊されていた。ナギと同じ状態である。

そのナギが語りかけてきている、ような気がした。

『海斗……聞こえる?』

幻聴に違いなかった。ナギは言葉を話せる状態ではない。海斗の聴覚も、すでに死んでいる。

『聞こえてるんでしょ、海斗……空耳でも走馬灯でもないから、こつち見なさい』

『……ナギ……なのか……?』

こつちを見る、などと言われても見えはしない。

ただ、ナギがそこにいるのはわかる。

『あたしも声、出せないから……何だろ、第六感？　みたいなので話しかけてるんだけど』

『俺も、耳は聞こえない……第六感で、ナギの声を聞いている……だけど……』

その第六感も、急速に弱まりつつある。

脳機能そのものが、停止しかけているのだ。

つまり海斗は、そしてナギも、死にかけているという事である。

死にかかった身体の中で、心の奥底で、しかし何か……目覚めかけている、ような気がする。

死に際の錯覚であろう、と海斗は思うのだが、ナギも同じものを感じているようであつた。

『感覚が全部、死んじやった……代わりに何か、動き始めてる……そんな感じ……ねえ、海斗もそうでしょ？　何なの、これ……』

『ああ……五感も、第六感も全部、死んだ……その代わりに、何か……』

視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、第六感。それらが巨大な蓋を成し、封じ込めていたもの。

蓋が破壊された事によって、それが今、目覚めつつある。海斗はそう感じた。

錯覚、ではない。何かが覚醒し、燃え上がりつつあるのだ。

五感、それに第六感の、さらに先にある……七番目の、何かが。

動けぬはずのナギが、立ち上がっている。それが海斗にはわかった。

自分もまた、立ち上がっている。

身体を動かして立ち上がった、という気が海斗はしなかった。

目覚め、燃え盛っている七番目の何か、自分を動かしている。

自分ではない、ようできて自分というものの根幹を成す、何か。

「不覚……！　我ながら、何と迂闊な……」

ダゴンが、何やら狼狽している。

「アテナの聖闘士を、その領域に追い込んではならないと……言い伝えられていた事を、私は何と愚かにも！」

小宇宙の激震を、海斗は感じた。目覚めつつある、七番目の感覚でだ。

ダゴンが、己の小宇宙を燃やしている。ルレイエ全体が激震するほどにだ。

「君たちを、それに目覚めさせるわけにはいかない……死んでもらうぞ。このダゴン最大の奥義をもって！」

## 第5話

犬に人間用の傷薬を塗りつけ、包帯を巻く。

それで怪我が治るのかどうか、漁牙としてはいささか疑問を感じなくはない。

だが、治る。

その少女を見ているうちに漁牙は、自然に、何の根拠もなく、そう確信していた。傷を負った仔犬の前肢に、包帯を巻く。

少女のその愛らしい指先から、何やら不思議な力、としか表現し得ぬものが溢れ出しているからだ。

「おまえを、こんな目にあわせたのは誰？ おじいさまにお願いして、潰してあげましようね」

そんな事を言いながら、少女が微笑む。

自分たちには決して向けてくれない笑顔だ、と漁牙は思った。

この少女が拾って来たのか、あるいは城戸邸に迷い込んで来たのか。

とにかく、その仔犬は怪我をしていた。

そして、城戸邸のお姫様とも言うべき令嬢に、手当てをしてもらっている。

令嬢は7歳、漁牙も7歳。

同じ年齢でも全く違う、と漁牙は思う。

この少女は、城戸邸の令嬢であり、お姫様であり、女王であり、皇帝であり、対する自分は奴隸……否、奴隸ですらない。良くても愛玩動物か。いや、愛玩などしてもらえない。

仔犬の方が、自分たちよりもずっと大切にされている。

そんな事を思いながらも漁牙は、木陰からじつと見入った。

城戸邸の、広大な庭園の片隅にある、夢のような光景に。

「さあ、もう大丈夫よ……あら、まだ痛いのか？」

この少女が、優しい声を発している。優しく微笑んでいる。

漁牙にとっては、まさしく夢にも等しいほど、ありえない事態である。

小さな前足に包帯を巻かれた仔犬が、少女に甘えてゆく。

少女は、可憐な細腕で仔犬を抱き上げていた。

「では痛くなくなるまで、こうしていきましょうね。うふふ、痛いの痛いの飛んで行きなさいー」

不思議な力、としか表現し得ない何か、少女の小さな全身から溢れ出し、仔犬を包む。

盗み見をしている漁牙の心をも、包み込む。

(お嬢様……ほんとは、優しいんだなあ……)

木陰で漁牙が夢見心地になっている間、しかし事態は急変していた。

「……何をしているの、そんな所で」

少女が、仔犬を抱いたまま、こちらを見ている。睨んでいる。

冷たく鋭く澄みきった瞳が、木陰で立ちすくむ漁牙を射すくめている。

「そこから出て来なさい。お前……確か、檄？ だったわね」

「い、いえ漁牙ツス。檄はもうちつと、うすらでかくて頭悪そうで」

へらへらと愛想笑いを浮かべながら漁牙は、少女の面前へと歩み出た。

左腕で仔犬を抱いたまま、少女が右手で鞭を突きつけてくる。先日、邪武の尻を滅多

打ちにした鞭だ。

「誰でもいいわ。お前……そこで私を、盗み見ていたのね」

「ほ、ほっこりしてたつす。へへへ」

激痛が、漁牙の顔面で弾けた。

少女の鞭が、頬の辺りを直撃していた。

「あつ……つ……ツ、あふうつ……く……く……」

頬を押さえながら、大柄な身体を屈めてうづくまる漁牙。

見下ろしながら、少女が命ずる。

「お前、馬……は、もういいわ。犬になりなさい」

「はっ、はひ……くうん、わんわん！ わひいいいん！」

犬の鳴き声、と言うよりも悲鳴を張り上げ四つん這いで走り回る漁牙に、少女が冷ややかな眼差しを向ける。愛らしい美貌に、微かな嘲笑を浮かべながらだ。

クンクンと甘える仔犬を左腕で抱いたまま、少女が鞭を一閃させる。

「犬は可愛い……だけど人間の形をした犬は、とても無様」

漁牙の背中にビシッ！ と激痛が走る。

鞭打たれた犬の如く這いつくばりながら、漁牙は悲鳴を上げた。

自分が犬なのか人間なのか一瞬、わからなくなつた。

そんな漁牙に、少女が問いかけてくる。

「それで……お前、私の何を盗み見ていたの？」

「や……やさしい……と……」

泣きながら、漁牙は微笑んだ。涙と鼻水にまみれた顔で、令嬢を見上げた。

「お、おれ……かندوق、してます……お嬢様、ほんとは優しいんだって……みんなにも

……」

「余計な事は言わないように」

漁牙の口元に、鞭が飛んで来た。

唇を押さえて転げ回る漁牙に、少女が冷ややかな、眼差しと命令を降らせて来る。

「お前は何も見なかったのよ。見ざる、言わざる、聞かざる……お前、猿になりなさい」

あの時、漁牙は猿になった。

目を閉じ、耳を塞ぎ、口からは滑稽な悲鳴を発しながら、ひたすら鞭打たれて跳ね回った。

今、自分を打ちのめしているのは、しかしあの令嬢ではない。

出来損ないの聖衣のようでもある、異形の鎧をまとう男だ。

うつすらと目を開きながら漁牙は、ようやくそれを思い出した。

「……まいった……走馬灯の思い出が、コレかよ……」

口をきくのも億劫なほど力を消耗している、にもかかわらず漁牙はそんな言葉を発していた。

そして、起き上がる。

武骨な竜骨座の聖衣をまとう巨体が、よろよると立ち上がって身構える。

「アテナの聖闘士は……打たれ強さが唯一の取り柄である、と聞くが」

ゾス・オムモグが呆れ、嘲笑う。

「ここまで往生際が悪いとはな。楽に死にたい、とは思わないのかね」

「あいにくだな……お嬢様に、しばいてもらえらつてんならともかく……てめえなんぞにブチのめされて、気持ち良くお寝んねしようって気にやあなねえよ」

眼前に立つゾス・オムモグの姿が、かすんでいる。目が、見えなくなりかけているのか。

問題ない。

敵の、おぞましいほどに邪悪な小宇宙は、視覚ではないものでしつかりと感じられるのだ。

その小宇宙が、凄まじい勢いで膨張し、燃え上がってゆく。

「嫌でも眠りにつく事となる。この一撃でなあ……ディープシー・スターライトバーストッ！」

ゾス・オムモグの両肩……巨大な金属のヒトデが2つ、激しい光を発した。

禍々しい攻撃的小宇宙が、激烈な可視光となって迸ったもの。それが、真正面から漁牙を襲う。

襲い来る小宇宙の光の奔流を、漁牙は見極めた。

見る事が出来た。かわす事も出来る。聖闘士に、同じ技は何度も通用しない。だが、琴の音が、ルルイエ全体を包み込むように流れている。

全世界におぞましい悪夢を垂れ流す邪神を、眠らせるための楽曲。

漁牙の背後で今、1人の少年が、それを奏でているのだ。

青銅聖闘士、鱸座の勇魚。

彼は今、涙を流しながら、豎琴を掻き鳴らしていた。

いや、涙ではない。

潰れたように閉ざされた、その両目からは鮮血が溢れ出し、嬾やかな少年の顔を赤く濡らしている。

勇魚は今、五感を損傷するほどに己の小宇宙を振り絞って楽の音に変換し、迸らせているのだ。

ルルイエの地底あるいは海底に鎮座して悪夢を振りまく邪神を、眠らせるために。

だが、足りない。

この神を、夢も見ないほどの眠りに陥らせる。そのためには勇魚の力だけではなく、もう一撃が必要なのだ。

だから海斗とナギが、ルルイエの内部へと向かった。

この場に残った漁牙と勇魚をもろともに粉碎する勢いで、デーパーシー・スターライトバーストが襲い来る。

勇魚の楯となる格好で立ったまま、漁牙は小宇宙を燃やした。

「スカルドラゴン・クラツシヤアアアアアアアア！」

燃え上がり、立ち昇った小宇宙が、巨大な竜の姿を形作る。

鱗も肉も臓物もない、骨格だけの竜。

それが、迫り来るディープシー・スターライトバーストにぶつかって行く。

骨の竜が、一瞬にして砕け散り消滅した。ディープシー・スターライトバーストの威力を、いくらかは殺す事が出来たのか。

漁牙は直撃を喰らい、吹っ飛び、勇魚にぶつかりそうになりながら仰向けに倒れた。

『……漁牙……倒れたのかい？』

すぐ近くにいるはずの勇魚の声が、ずいぶんと遠い。耳も、聞こえなくなり始めている。

『まさか、とは思うけど……僕を庇って、敵の攻撃を受けたんじゃ……ないだろうね……？』

「バカやろう……誰が、てめーなんざあ……」

言いかけて、漁牙は気付いた。

勇魚は、口を動かしていない。

口から発する言葉、ではないもので勇魚は今、喋っている。

『唇と、それに舌の感覚がないんだ……指も、ね』

豎琴を掻き鳴らす指先が、血まみれである。音曲に合わせて、鮮血の飛沫が散る。

勇魚は今、弦の感触すら感じていないのではないかと漁牙は思った。

『こんな状態なのに……何故だろう、いつもより良い音が出ている……ような、気がするんだ……耳は、聞こえないけれど』

「俺もな、耳がダメになりかけてる……てめえの下手くそな音楽が、いつもよりずっとマシに聞こえちゃうくらいになああ……」

五感が、ことごとく死んでゆく。

それによって、五感ではない何かが身体の奥で目覚めつつあるのを、漁牙はぼんやりと感じた。

倒れていた身体が、いつの間にか立ち上がっている。

「哀れな……もはや死に体ではないか」

ゾス・オムモグが呆れている。

「そこままでして何故戦う。諦めない心、折れない心を褒めて欲しいのか？」

「そんなんじゃないやあねえ……ただ、てめえが弱っちいってだけの事よ」

ゾス・オムモグに、漁牙は人差し指を向けた。

「てめえの攻撃なんざあ全然効いちやいねえと、要するにただそれだけの事よ！」

「……アテナの聖闘士は、往生際の悪さが取り柄というだけではなさそうだな。身の程

知らず、でもあるようだ」

ゾス・オムモグの小宇宙が、怒りで揺らめく。

「良かろう、そこまで命が要らぬと言うのであれば……むっ!？」

異変が起こった。

その異変を、漁牙も感じ取っていた。目覚めつつある、五感でも第六感でもない何かで。

ルルイエ内部で、とてつもなく強大な小宇宙が渦巻いている。

それが、この異形の神殿を浮かべる海域そのものにまで影響を及ぼしていた。

海面が荒れ狂い、半ば津波に近いほどに隆起して、ルルイエの石畳を激しく叩く。

漁牙のいる所にまで、水飛沫が飛んで来る。

「こ、これは……この小宇宙の高まり……まさか、ダゴン様が……」

ゾス・オムモグが、何やら戦慄しているようだ。

「あの技を、お使いになるのか……迷い込んだ小魚にも等しい青銅聖闘士2匹が、まさかそれほどの相手だと言うのか……!」

ルルイエ周辺で、海が荒れ狂っている。

海原の大振動が、この迷宮内部にまで伝わって来る。

「細胞のひとつかけらも残さず、この海に消え果てるが良い……アテナの聖闘士たち」

海そのものを揺り動かす小宇宙を発しているのは、ダゴンである。

その小宇宙が、今から自分たちを襲う。

羅針盤座の海斗と、帆座のナギ。2人の青銅聖闘士を、一緒に粉砕せんと燃え上がり渦巻く小宇宙。

それを、ダゴンが放つて来る。

「受けよ、我が奥義……ケイオティック・オーシャン！」

小宇宙の渦巻き、小宇宙の奔流、小宇宙の荒波。

否……それは、小宇宙の海であった。

巨大な海そのものが、荒れ狂いながら押し寄せて来る。

その前に、ナギがいつの間にか立っていた。海斗を、背後に庇う格好でだ。

(ナギ……！)

呼びかけようとしても、声は出ない。舌も、声帯も、麻痺している。

海斗の五感は、すでに死んでいるのだ。そしてそれは、ナギも同様であるはずだ。

満身創痍の細身に、水着のような青銅聖衣を装着した少女が、荒れ狂う小宇宙の大海原に身を晒している。

まるで天女の羽衣の如く光り揺らめくものを、まといながらだ。

『セーリング・カウンター……』

ナギの小宇宙が、静かに燃え上がる。

視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、それに第六感。その全てを失った少女が、7番目の何かを覚醒させながら小宇宙の帆を広げ、迫り来る死の大海原へと挑んでゆく。

まるで、大波に揉まれる小舟だった。ちっぽけな帆は、今にも折れて破けてしまいうである。

7番目の力でしっかりと立てられ張られた帆は、しかし折れなかった。破れなかった。ちぎれそうにはためきながらもケイオティック・オーシャンを受け止め、船の推進力へと変換してゆく。だが。

『うっ……く……っ！』

ダゴンのもたらす小宇宙の奔流、小宇宙の荒波の中で、ナギの細身が痛々しく揺らぐ。保たない、と海斗は思った。

やはりナギー人では、ダゴンの強大な力を完全に受け止める事は出来ない。ナギー人ならば、だ。

『俺によこせ、ナギー！』

耳では聞こえぬ声で、海斗は叫んだ。

『俺が、叩き込んでやる……お前の受け止めた、それを』

『……まかせた……わよ……海斗……』

ナギの細い身体が、よろめき、もたれかかって来る。

海斗は、左腕で抱き止めた。

激しくはためく小宇宙の帆が、海斗の全身にまとわりつく。

帆に吸収されたケイオティック・オーシャンの破壊力全てが、全身に流し込まれて来る。

海斗は、血を吐きながら右拳を握った。

体内に流し込まれて来たもの全てが、その拳に集中してゆく。

海斗は叫んだ。もちろん声にはならない。血を吐きながらの、無言の叫び。

それと共に、右拳を繰り出す。

流星拳。パンチをただひたすら高速で放つだけの、聖闘士にとつては基本中の基本と  
言うべき技。

そこに海斗は、ナギから受け取ったもの全てを宿し、叩き込んだ。

ケイオティック・オーシャンの全破壊力を孕んだ流星拳が、ダゴンを襲う。

「む……っ」

風に舞う木の葉のように身を翻して、ダゴンはかわした。

絶大な破壊力の塊となった流星拳が、そのまま高速直進して迷宮の奥へと消えて行

く。

「……肝を冷やしたぞ。どうやら、君たちを侮っていたようだ。最強の技を考え無しにただ放つだけで倒せるなどと」

ダゴンが言った。

「だが、これで終わりだ。あれを外してしまった以上、もはや君たちには何も残ってはいまい」

『……何度でも、言うぞ。俺は……羅針盤座の、聖闘士だ……』

叫ぶように、海斗は激しく念じた。

『外しはしない……攻撃を、正しい方向へ……導くだけさ……狙いは、お前じゃないんだ』

「何……!」

ケイオティック・オーシャンの破壊力を内包した流星拳は、ダゴンに回避された今もなお、迷宮の奥を直進している。

いや、左へ曲がった。

続いて右に曲がり、しばらく直進した後、右折と左折を繰り返す。そして下り階段に到着し、下へと降りて行く。

ルルイエの最下層、最奥部へと向かって、巨大な破壊の流星は迷宮内を飛翔し続ける。

海斗の、小宇宙による操作に従ってだ。

『これが……俺の、必殺……ナビゲーション・ブロー……!』

ルルイエ全体が、揺らいだ。少年は、そう感じた。

ミソペサメノスと同系統の秘術で己を仮死・休眠状態に落とし込んでいたのは、ルルイエの神が発信する狂気の悪夢から身を守るためだが、その休眠も覚めてしまった。

狂気の悪夢は、しかし襲って来ない。

謎めいた小宇宙を、少年は仮死状態にありながら、ずっと感じてはいた。

それは、音楽であった。

恐らくは豎琴によるものであろう小宇宙の調べが、先ほどからずっとルルイエの神に干渉していたのだ。

演奏者は、どうやら神を眠らせようとしていたらしい。壮絶なまでの無謀、とは言える。

だが今、神に一撃を叩き込んだ者がいる。

まるで、流星のような一撃だった。

流星あるいは隕石が、ルルイエの最奥部のみを直撃した。

そんな烈しい小宇宙の激震を、少年はこの牢中にいながら感じていた。

まだ完全に力を取り戻してはいない神を、怯ませるには充分な一撃だった。怯んだ神に、小宇宙を孕む豎琴の楽の・音が襲いかかる。

神が再び、夢も見ないほど深い眠りへと落ちてゆくのを少年は感じた。

「……誰だか知らんが……よく、やってくれた」

両手両足を拘束していた鎖を、少年は引きちぎった。

ルルイエの神は眠り、狂気の悪夢も消え失せた。もはや仮死の秘術で待機し続ける必要もない。

「夢も見ない……どころではない。永遠の眠りに就かせてやるぞ、異形の神よ」  
眩きつつ少年は、否、と思った。

あれは、神などではない。

大海原に汚れをもたらず、おぞましい怪物でしかないのだ。

この海という領域において、神と呼ぶべき存在は1つしかない。

「ポセイドン様の聖域を穢す者ども……生かしてはおかぬ」

つい今まで休眠状態にあった少年の全身に、小宇宙が満ちてゆく。

細く無駄なく鍛え込まれた身体を包む鱗衣が、光を宿した。

「1匹残らず、魚の餌にしてくれるぞ。この、カリユブデイスのガニメデが！」

## 第6話

狂気の夢は、消えて失せた。

ルルイエの神が、夢も見ないほどの深き眠りに落ちたのだ。

「ば、馬鹿な……これは、このような事が……！」

ゾス・オムモグが狼狽している。

「我らの神に……貴様！ アテナの聖闘士ごときが不遜にも何を仕掛けた！」

『お前たちの神には……永遠に、安らかに、眠っていてもらう……』

青銅聖闘士・鱸座の勇魚が、己の思いを念じている。もはや五感が死に、目も耳も鼻もそれに口も機能を失い、舌を動かして発声する事が出来ない状態である。

『……お前もだよ、ゾス・オムモグ……子守唄を、奏でてやろうか？』

出来るわけがない。青銅聖闘士・竜骨座の漁牙は、そう思った。

豎琴を抱える、勇魚の両手は血まみれである。指先の感覚など、すでに失われているだろう。

この少年は今、己の五感を、生命を、小宇宙を燃やし尽くし、子守唄を奏でたのだ。神をも眠らせる、子守唄を。

ゾス・オムモグと戦う力など、残っているはずはない。

それは自分の役目だ、と思い定めながら、漁牙は立った。勇魚を背後に庇い、ゾス・オムモグと対峙した。

『てめえの相手は俺だ……子守唄なんかじゃ眠らせねえ、ぶちのめして永遠にお寝んねさせてやんからよ』

「小僧どもが！」

ゾス・オムモグの全身で、憤怒の小宇宙が燃え上がる。

次の攻撃を喰らえば、自分は死ぬ。それが漁牙にはわかった。

何も出来ない。自分に残っているのは、この尽きかけた命だけだ。

五感も第六感も、死んでいる。

それらに続く七番目の何かが目覚めかけている、ような気もする。死に際の錯覚であろうか。

『漁牙は昔……蛮あたりと一緒にあって、僕を……よく、いじめてくれたよね……』

勇魚が、漁牙の背中にもたれてくる。もはや立っている事も出来ないようだ。

『こんなふうに、庇ってくれる真似事をしたって……僕は、許さないよ……』

『リベンジマツチなら、いつでも受けてやる。今は、まあやめとけ』

『まったく……君なんか、託さなきゃ……いけない、なんてね……』

熱い、と漁牙は感じた。とてつもない熱さが、背中から伝わって来る。

勇魚の細い身体の中で、何かが燃え盛っているのだ。

漁牙と同じく……7番目の、何かが。

『僕の……小宇宙を、君に……』

悲しくなるほど少量の小宇宙が、しかし熱く燃え滾りながら、漁牙の体内に背中から流れ込んで来る。

『……海斗とナギは、上手くやってくれたみたいだ……あとは、僕たちが……1人でも、多くの敵を……』

『……そうだな』

漁牙と勇魚、2人分でもゾス・オムモグ1人分には遠く及ばぬ微量の小宇宙が、激しく燃え上がった。

漁牙の大柄な全身から、巨大な竜の姿が立ちのぼる。生きた竜ではなく、骨格である。

もはや博物館にでも展示するしか使い道のない、竜の白骨死体……否、まだ屍ではなかった。

巨大な骸骨に、肉が、臓物が、まとわりついてゆく。

竜は、蘇りつつあった。

「死に損ないの虫ケラどもが……!」

ゾス・オムモグの小宇宙が、光となって押し寄せて来る。

「いい加減に死と敗北を受け入れよ、そして我らが神への供物となれ！ デイープシー

・スターライトバーストツ！」

ここまでだ、と漁牙は思った。

ルレイエの奥底に眠る狂気の神を、討ち滅ぼすところまでは出来そうにない。海斗とナギも今頃、生きているかどうか。

狂気の悪夢を世界中に垂れ流していた神を、しかし一時的にせよ活動停止させる事には成功した。

後は託すしかない。

聖域にはまだ黄金聖闘士たちがいる。いくら頼りにせよ白銀聖闘士たちもいる。

いや、序列を考えれば次は星矢たちの出番であろう。紫龍もいる。氷河もいる。一輝と瞬の兄弟もいる。それに。

『後は、頼むぜ……檄、蛮……那智に、邪武……あとは、市か……大丈夫かなあ、おめえらで』

若干の危惧を感じつつ漁牙は、屍の竜を一気に蘇らせた。

いや、完全には蘇らない。中途半端に肉体を再生させ、全身あちこちで骨や臓物を露

出させた、まるで腐乱死体のような竜が出現していた。

蘇りかけの竜、死にかけの竜。

まさしく今の自分と勇魚だ、と思いつつ漁牙は、

『まあいい、とつとと聖域に帰って来やがれよ……敵は、1匹でも多く！ 減らしといてやつからよ！』

死にかけた竜を、咆哮させた。襲い来るゾス・オムモグの小宇宙に向かってだ。

『喰らいやがれ必殺！ ドラゴンゾンビ・フルバアアアアアアストッ！』

竜の大口から、だけではない。腐乱死体のような全身あちこちの欠損箇所から、炎が溢れ出した。

その炎が、竜自身の巨体を焼き尽くしながらも迸り、渦を巻きながらゾス・オムモグを襲う。

デーパーシー・スターライトバーストが砕け散った。

光の破片をキラキラと蹴散らしながら炎の嵐は吹き荒れ、ゾス・オムモグを灼き砕く。断末魔の絶叫が、一瞬だけ響き渡った。

つい今までゾス・オムモグであった大量の遺灰が、潮風に舞う。

勇魚と背中を合わせたまま、漁牙は尻餅をついていた。もはや立ち上がる力もない。

『……勇魚……おい……』

呼びかけてみる。返事はない。

もう1度、呼びかけてみるだけの力も、漁牙には残っていないかった。

羅針盤座の海斗、帆座のナギ。

2人の青銅聖闘士が、目の前で倒れている。

ダゴンが倒した、わけではない。この兩名は、力尽きたのだ。

己の力を、命を、小宇宙を燃やし尽くし、やり遂げたのである。

神を眠らせる、などという神話的な事をだ。

「やってくれた……な。この私の目の前で」

ダゴンは言った。海斗もナギも、応えない。

もはや口をきく事も、何かを念ずる事も出来ない有り様である。

辛うじてまだ生きてはいる。とどめを刺すのは、容易い事だ。

それをしたところで、しかしダゴンの勝利であると言えるのか。

「……負けた、のだな私は。お前たちに……」

神が再び、眠りについてしまった。これはダゴンの、ごまかしようもない失態である。

死にかけて青銅聖闘士の少年少女に、腹いせの如くとどめを刺したところで、その大

失態が帳消しになるわけではないのだ。

笑い声が、聞こえた。

「クヒヒヒヒヒ……一体ダゴン様ともあろう御方が、何をしておられますやら」

不快な小宇宙を、ダゴンは先程から感じてはいたのだ。

「我らの神が眠りについてしまわれましたぞクヒヒヒヒ。何が起こったのでありましようなあダゴン様」

「……私の失態だ。裁きも罰も受けよう。私を罵倒したければ、するがいい」

潮の匂いに満ちた迷宮内の闇が、人型に実態化を遂げたかの如く佇む細身の影を、ダゴンは睨み据えた。

ひよろ長い長身を覆う鎧は、全体にびっしりと吸盤を備えている。

「ここぞとばかりに私を攻撃したいのであろう？ ユトグサよ」

「クツヒヒヒヒ……そのようなつもりは毛頭ございませんよダゴン様。私はただ、貴方が苦戦をしておられるようなんですのでね」

死にかけた青銅聖闘士2名に、ユトグサのどろりとした眼差しが向けられる。

「余計な事とは知りつつもクヒヒヒヒヒ、こうして出しゃばって参りました次第で」

「戦いはすでに終わっている。貴様に手伝ってもらおう事など何もない。立ち去れ」

「クヒ……気付かぬふりをしておられるのでしょうか、ダゴン様は」

汚水の如く濁りきったユトグサの目は、海斗とナギに向けられたままだ。

「その2匹、まだ生きておりますぞ。何故とどめをお刺しにならないのです」

「放つておいても死ぬ。数分後には屍だ。死体を、わざわざ破壊する事もあるまい」

「その数分の間に、何が起こるかわからぬのですぞ」

ユトグサの、言葉そのものは間違っていない。

「我らの神が再び眠りに落ちてしまわれた、この事態……恐れながらダゴン様の御油断が招いたものと愚考いたしますがクヒヒ、如何に？」

「……………」

何も答えられずにいるダゴンの傍を、ユトグサが通り過ぎて行く。折り重なって倒れる青銅聖闘士2名に、歩み寄って行く。

「まあ何ですな。ダゴン様は武人であらせられるから、死にかけてた女子供に拳を振るう事などお出来にならぬでしょう。汚れ役はクヒヒヒ、このユトグサめにお任せを……女子供とは言え敵です。よもやお止めにはなりませんでしょうか？」

敵にとどめを刺すな、などと言う事は出来ない。

ダゴンが何も言えずにいる間ユトグサは、ナギの髪を掴んでいた。

「ほおう、美しい身体をした娘ではないですかクツヒヒヒ。まあ顔はわかりませんが……ちよつと仮面を取ってみましようかねええ」

『……………やめろ……………』

海斗が倒れたまま、ユトグサの足首を掴んでいた。

『やめ……ろお……』

「ああん？ 何ですかあの生ゴミはっ！」

海斗の頭を、ユトグサは思いきり踏みつけた。

羅針盤座のマスクに亀裂が走り、鮮血の飛沫が散った。

「いけませんねえークツヒヒヒヒ、ルルイエの内部は綺麗にしておかなければ。このよ  
うなゴミを散らかしておいてはいけませんよオーダゴン様！」

笑い喚きながらユトグサが、ナギの髪を掴み、海斗をガスガスと踏みにじり蹴り転が  
す。

ダゴンは舌打ちをしつつ、拳を握った。

このままユトグサなどに捌り殺されるよりは、やはり自分がとどめを刺してやるべき  
なのだ。

「この私に……失敗を強いてくれた者たちなのだから、な」

ユトグサによる暴虐に遭っている青銅聖闘士の少年少女に、ダゴンが拳の狙いを定め  
た、その時。

とてつもなく攻撃的な小宇宙が、迷宮内の闇を切り裂いた。

何者かが、ダゴンよりも早く、拳を振るったのだ。

闇を切り裂く、その一撃を、ダゴンは辛うじてかわした。

かわす事の出来なかったユトグサが、ナギの髪を手放しながら悲鳴を上げ、吹っ飛んで行く。

「ぎゃ……びい……」

吸盤だらけの鎧をまとう長身が、へし曲がりながら石畳に激突した。

足音が聞こえて来る。声と、共にだ。

「ポセイドン様の聖域たる、この海を……ただ居るだけで穢してゆく者どもよな、貴様たちは本当に」

何者だ、などとダゴンは訊かない。

この少年とは先頃、ルルイエのもう少し奥深い場所で、命のやり取りを繰りひろげたものだ。

あの時は辛うじてダゴンが勝ち、この少年を捕える事が出来たのだが。

「貴様を、いつまでも捕えておけるはずもなし……殺しておくべきであった、とは言うまい」

ダゴンは言った。

「カリユブデイスのガニメデよ。貴様とはもう1度、戦ってみたいと思っていたところだ」

「無理をするなよダゴン。殺しておけば良かったと、無様に後悔して見せろ」

海斗とはほぼ同年齢と思われる若き海鬪士が、牙を剥くように微笑んだ。

「俺を生かしておいたのは、貴様ではなくハイドラあたりが何やら企んでの事であろうが知らん。知った事か。俺はただ奴を倒し、貴様を倒し、貴様たちの神をも倒して、ポセイドン様の聖域より穢れを取り除くのみ」

ガニメデの視線が、ちらりと動いた。

「あとは、まあ……ついだ。貴様も、倒しておくとしようか」

「クヒ……こつ、小僧お……」

ユトグサが、ふらりと立ち上がったところである。

「な、なめた事してくれおつてクヒツ……クツヒヒヒ、このユトグサを怒らせた以上、死ぬ覚悟は出来ておるのだから楽には死なせん。お願いです殺して下さいと泣き喚きながら、ゆっくりと死んでゆくのだ貴様は」

「安心しろ、俺は貴様を楽に死なせてやる。まあ無駄な抵抗をしてみるがいい。おいダゴンよ、構わんから加勢をしてやれ」

「……だ、そうだ。どうするユトグサよ、手を貸してやろうか？」

「要りませんよクヒヒヒ。もはやダゴン様お一人に大きな顔はさせません。このユトグサの力、貴方様にも一度お見せしておかねばなりませんまい」

ひよろ長い長身から、禍々しい小宇宙を立ちのぼらせながら、ユトグサがダゴンの横を通り過ぎてガニメデと対峙する。

海斗とナギは、倒れたままだ。

今のうちに逃げてくれれば良いのだが、とダゴンは一瞬だけ思った。

## 第7話

黄金の煌めきが見えた、ような気がした。

(誰……まさか、黄金聖闘士の……どなたかが……?)

だとしたら、この上ない失態だ。青銅聖闘士・鱸座の勇魚は、そう思う。

やはり青銅聖闘士には任せておけぬ。

黄金聖闘士たちに、そう思われてしまったのだとしても、まあ無理はない。

自分も、それに竜骨座の漁牙も、ルルイエ表層部の戦いで、こうして力尽きてしまった。

ルルイエ内部へと向かった海斗とナギの小宇宙も、今やほとんど感じられない。

青銅聖闘士4名が、力尽きるまで戦って辛うじて成し得た事は何か。

人々を狂気の夢に迷い込ませる邪神を、一時的に眠らせただけではないのか。

「狂気の神が、一時的にせよ眠りについた……君たちの力によるものか」

黄金の煌めきを放つ何者かが、言った。

言葉と共に、圧倒的な小宇宙が勇魚の全身を包み込む。

祈りを捧げる、美しい乙女の姿が見えた。

視覚が死んでいても、幻覚は見えるのか。

視覚だけではない。五感も、第六感も、破壊された。

辛うじて機能していた7番目の何かも、今や燃え尽きようとしている。

「さすがはアテナの聖闘士……と、認めるしかないようだな。本来、私がやらなければならぬ事を君たちがしてくれた」

「貴方は……うぐっ！」

激痛が、勇魚の全身を駆け抜けた。

感覚が、蘇ったのだ。

痛みを、肉体で感じられる。

潮の匂いを嗅ぐ事も出来る。舌を動かして、ものを喋る事も出来る。

「貴方は、僕たちに……治療を施して……くれている、のですか……？」

「君たちならば、戦力として利用出来そうなのでな」

相手の肉声を、耳で聞く事も出来る。

勇魚の五感は、回復していた。

黄金の煌めきをまとう青年の姿を、目で確認する事も出来る。

勇魚と面識のある黄金聖闘士数名の、誰でもなかった。

(違う……黄金聖闘士、ではない……?)

とてつもない小宇宙の持ち主、ではある。

だが黄金聖闘士とは何かが異なる、その青年がさらに言う。

「ホーリーメイデン・プレイア……6つの獣を従える、乙女の聖なる祈り。私の7番目の技だ」

攻撃ではなく、癒しをもたらす技。

それが、勇魚だけでなく漁牙の身体にも、黄金の光となってキラキラと降り注ぐ。

祈りを捧げる、美しい乙女の姿を、勇魚はじつと幻視していた。

ひらひらと揺れる衣の下に、しかし何か凶悪なものたちが潜んでいるようでもある。

6つの獣を飼う乙女。

そんな小宇宙を立ちのぼらせる青年に助け起こされながら、漁牙が呻く。

「う……ん……さ、沙織お嬢様……俺、今日はブタになりますからああ……」

「その男は、海にでも放り捨てて下さい」

「フツ……そうもいくまい。見たところ君たちは2人で1人前のようにだ」

黄金聖闘士と似て非なる、その青年が、周囲を見回した。

「いや。もう何人か、いるのか？」

「あと2人。今は、ルルイエの中に……そうだ、こうしてはいられない！」

勇魚は、豎琴を掻き鳴らした。

「漁牙、起きろー！」

「ぐわああああ！ さっ沙織お嬢様の歌が、俺の脳ミソを破壊するううう」

聴覚の回復した漁牙が、両耳を抑えながらのたうち回り、目を覚ます。

「……と思ったら、おめえかよ勇魚。死んでまでテメーの演奏聞かされるたあ」

「残念、君はまだ生きてるよ。この人が助けてくれたのさ」

「助かったのなら、さっそく私に協力してもらおうか」

6つの獣を飼う乙女、そのもののように美しく禍々しい青年が言った。

「私も君たちも、最終目的は同じ……はずだな」

「……ルルイエの奥底に眠る神を、斃す」

黄金聖闘士にも等しい、と思える小宇宙を持つ青年を、勇魚はじつと見据えた。

「僕たちは、アテナの聖闘士として、それを行う。貴方が……それをしなければならぬ

理由は？」

「おぞましい出来損ないの神を、ポセイドン様の聖域より取り除く。それも我らの使命」

アテナの聖闘士にとって、冥王ハーデスと並ぶ警戒対象である神の名が、青年の口か

ら出た。

「……この南太平洋は、私の管轄だからな」

ユトグサのひよろ長い全身から、暗黒が噴出した。

何も見えなくなった。ルルイエの陰鬱な迷宮風景も、その中に佇むダゴンの姿も、死体寸前の有り様で倒れる青銅聖闘士の少年少女も。

さしあたって直接、戦わなければならない相手である、ユトグサの姿もだ。

海闘士・カリユブデイスのガニメデは今、闇の中にいた。

何も見えない。ルルイエ内部に充満している潮の臭いも感じられない。潮臭い空気が皮膚に触れてくる感触もない。

恐らく自分は今、耳も聞こえなくなっているのだらうとガニメデは思った。

ただ、不快な意思は伝わって来る。闇の中からだ。

『何も見えまい、聞こえまい、感じられるまいがあクツヒヒヒ。五感の全て、いや第六感すら封じ込める真の暗黒！ その中に1人取り残された気分はどうだ』

「……なるほど、な。見事なものだユトグサ。貴様の薄汚い意思は感じられても、存在は全く感じられん」

ガニメデは、とりあえずは誉めてやった。

「暗がりに隠れるのは、たいそう上手いようだな」

『虚勢を張るな小僧、恐くば泣き叫べ！ 痛ければ泣き喚け！ 我らの神に、死と絶望を捧げ奉るのだ喰らええいフアントム・デプスマッシャー！』

暗闇のどこかから、攻撃が来た。無数の鞭あるいは触手で打ち据えるかのような、超高速の連続打撃。カリユブデイスの鱗衣の上から、容赦なく叩き込まれて来る。

ガニメデは吹っ飛んだ。

吹っ飛び続けているのか、どこかへぶつかって倒れているのか、この暗黒の中では何もわからない。

1つわかつているのは、自分がまだ生きている、という事だ。

「俺を……殺せる、とても思っているのか。この程度の攻撃で」

『一撃で殺せねば、廻り殺しにするまでよクヒヒヒヒ、喰らうがいいフアントム・デプスぐげべっ』

ユトグサの思念が、潰れた。

ガニメデが、闇の中に拳を打ち込んでいた。

『こっつ、小僧……貴様、私の居場所がわかるとでも』

「この暗黒の中で、貴様の存在を感じるのは確かに難しい。視覚、聴覚、味覚に嗅覚、触覚そして第六感までもが閉ざされてしまう闇……だが、7番目の感覚を用いれば」

『な……7番目、だと……』

「セブセンシズは、聖闘士どもの専売特許ではない」

暗黒の中から、ユトグサの怯えが伝わって来る。

「俺とて完全に目覚めているわけではないが、貴様の存在を掴む事くらいは……な。ふん、そこか」

『ひい……っ』

「もはや暗闇に隠れても無駄だ。カリユブデイスの大渦からは逃げられん……!」

ガニメデの小宇宙が、激しく渦を巻いた。

「海の怒りに吞まれて消えろ! スパイラル・ギガブラスト!」

暗黒が、ユトグサもろとも砕け散った。

細長い悲鳴を引きずりながら、闇の破片が渦を巻き、消滅してゆく。

潮臭く陰鬱な迷宮の風景が、戻って来た。

ダゴンが手を叩いている。

「見事……さすがだな。ユトグサの暗黒を、こうも見事に粉碎するとは」

「次は貴様を粉碎する」

ガニメデは、ダゴンと対峙した。

「俺を殺さずにいた、その理由は聞かん。貴様らなりの思惑があつたのだろうが、それが命取りとなつたな」

「……かも知れん。私としては、貴様を殺しておきたかつた」

ダゴンが言う。

「殺す機会を逸した結果、貴様は生きている。蘇ってしまった。ゆえに言おう……力リユブデイスのガニメデよ、我らの同志となれ」

「そういうのを、世迷言と言うのだ」

「これは貴様ら海闘士だけではない。アテナの聖闘士、ハーデスの冥闘士どもに対しても言える事だがな」

ダゴンの口調が、眼光が、強まった。

「己の仕える神を盲信するだけではなく、少しは自分の頭で考えてみてはどうだ」  
「何……」

「考えれば、わかるはずだ。いや、すでに気付いて、見ぬふりをしているのか？」

「ダゴン貴様、何が言いたい。命乞いにしては回りくどいようだが」

「わからぬなら、はつきりと言ってやろう。少しは気付け。己の頭で考えてみる。オリンポスの神々が、どれほど傲慢で冷酷で利己的で、仕えるに値せぬ存在であるかをな」  
黙らせるべく、ガニメデは拳を放った。

その一撃が、ダゴンの左手で弾かれた。さすがにユトグサとは違う。

「あのような者どもに、お前たちが命を懸ける価値などあるまい。我らの神に仕えるのだ、ガニメデよ」

「貴様らの神だと。それは、この海の底で惰眠を貪りながら悪夢を振りまくだけの、おぞ

ましい怪物の事か」

ガニメデは嘲笑って見せた。

ダゴンの秀麗な顔に、獯猛な怒りが浮かぶ。

「貴様……！」

「そういう事だ。己の仕える神を愚弄した者は、生かしておけん。そういう事なのだよ、俺も貴様たちも」

怒りの形相を正面から見据え、ガニメデは言った。

「己の仕える神のために、ただ戦う。俺たちには、それしかあるまいが！」

「……確かに。お前たちにとっては我らの神など、醜悪な怪物でしかなからう」

ダゴンの小宇宙が、静かに、激しく、渦を巻く。

「我らにとつては、オリンポスの神々など……醜悪な怪物、おぞましき暴君、破壊者、もはやいかなる言葉でも追いつかぬほど厭わしき存在よ。生かしておけぬ！　まさに、そういう事か」

それは、カリュプデイスの大渦にも匹敵する激しさだった。